

第4節 田下駄の形態変遷と機能

- 1 はじめに
- 2 田下駄研究小史
- 3 瀬名遺跡出土の田下駄
- 4 板状田下駄の形態変遷
- 5 板状田下駄の穿孔方法について
- 6 輪カンジキ型田下駄の形態変遷
- 7 田下駄の形態と機能
- 8 まとめ

1 はじめに

瀬名遺跡から板状田下駄が178点、輪カンジキ型田下駄が30点（足板の数である。）出土している。近年、静岡県内の低湿地性の遺跡の発掘調査が進み、従来の登呂遺跡、山木遺跡の資料に相当数の板状田下駄の資料が加わっている。特に、静清平野の田下駄資料は瀬名遺跡を初め、池ヶ谷遺跡、川合遺跡、長崎遺跡、有東遺跡、有東梶子遺跡、下野遺跡、小黑遺跡、神明原・元宮川遺跡などの遺跡から出土しており、300例を越える数に達している。輪カンジキ型田下駄も瀬名遺跡と川合遺跡八反田地区で横木及び輪を伴った完形のものが確認されており、静清平野は田下駄を検討する上で良好なフィールドである。中でも瀬名遺跡の田下駄資料は数の多さも勿論であるが、弥生時代中期、弥生時代後期前半、弥生時代後期後半～古墳時代前期、古墳時代中期と時期幅を限定することができる資料に恵まれている。そこでここでは、田下駄の良好な一括資料を明示できる瀬名遺跡出土の田下駄を専ら扱い、その形態変遷を中心に考えてみたい。また、これら田下駄が多数出土している静清平野の遺跡の板状田下駄は大きさにバラツキがある。平面積の大小がいかなるものか複数遺跡の田下駄を比較して検討してみたい。

拙文で扱う「田下駄」とは「稲刈りなどのときに湿田にはまりこまないためにはく」木製の履き物である。研究者の中には代掻き、緑肥踏み込みに専ら用いる長方形枠型の「大足」と、「稲刈りなどのときに湿田にはまりこまないためにはく」（木下 1969）、つまり足を浮かせるために履く「タゲタ・ナンバ」とを総称して、水田で履く物として「田下駄」と称する人たちもいる。たしかに水田で履く下駄ではあるが、足を浮かせる機能をもつ「田下駄」と、代掻き、緑肥の踏み込み機能をもつ「大足」とは明らかに機能が異なり、形態上も明瞭に一線を画せる以上、総称することをここでは避けたい。⁽¹⁾
⁽²⁾

2 田下駄研究小史

出土遺物としての田下駄の確認は千葉県菅生遺跡が嚆矢であろうか。菅生遺跡第1次調査（昭和13～16年）で縦長三孔の下駄が確認されている（乙益 1980）。が、本格的に研究対象となったのは、登呂遺跡、山木遺跡から多数の板状四孔の田下駄が出土してからであろう。登呂遺跡の田下駄については後藤守一氏が昭和29年に論じており（日本考古学協会 1978）、既に山木遺跡の第1次調査（昭和25年）で出土している田下駄も視野に入れて、田下駄を4形式に分類し、その用途まで言及している。「第1型式」は「小形のものであり、長さも28cmぐらいであり、幅は18cm、厚さ8mmの長方形板に前後の端に近く、かつ中央位におのおの一孔、左右側縁では中央よりも一方に片寄っておのおの一孔ある」ものであり、「第2型式」は「比較的細長い形」のもの、これは山木の三孔ある舟形木製品を示している。「第3型式」は「長さ38cm、幅16cm、厚さ4cm近くの厚板を選び取り、中央に幅10cm近く矩形をなす面を残し、その左右側面に対称に4孔をうがったもの」であり、「第4型式」は「幅は44cm、長さは18

cmという横長のものであり、中央に鼻緒や繰り緒のための孔が4個相對してあけられている」ものである。「第2型式」は輪カンジキ型田下駄の足板であり、「第3型式」は足台隆起の板状田下駄であり、「第4型式」は偏平の四孔板状田下駄のことであり、既に、その後の分類の基本となる原型が提出されている。後藤氏は機能について「現在の土俗をみると、普通の田ではこれを使っていない。泥田、深田、つまり粘土質であり、かつうっかり田の中に飛び込もうならば膝を没するようなところで用いている」として、湿田用の履物を指摘した。また、緑肥を踏み込む「代踏下駄」の機能もあり、登呂遺跡付近は深田ではないので、代掻きの機能を指摘したい意が明言はしていないが読み取れる。

山木遺跡は昭和25年に第1次調査が行われ、昭和42年は第2次調査、昭和50年に第3次調査、昭和51年に第4次調査、昭和53年に第5次調査、昭和55年に第6次調査、昭和57年に第7次調査、昭和59年に第8次調査が各々行われてきている。田下駄に関しては第3次以降でも少数出土しているが、第1次、第2次調査で多数を確認している。特に第1次調査の報告書として昭和37年に刊行された『葦山村山木遺跡』（後藤 1962）の中で、木下忠氏がまとめ報告した内容は、「日本の水田用の下駄」を「田下駄」と「大足」に分け、「田下駄」とは、「肥料その他の運搬や稲刈りのため湿田ではなく」ものとし、「大足」を「苗しろや本田に青草や積み肥を埋め込みあわせて、しろの泥を細かに練るためのしろ踏用の下駄」としている。更に、山木遺跡出土の田下駄を「長方形の板を縦長に使い、三つの緒あなを下駄のようにあけた型式のもの」と「長方形の板を横にを使って、翼のように浮力を応用し、中央に低い台を掘り出し、その側面に四つの緒あなをあけた型式のもの」との二種に分けている。また山木遺跡で多数出土している緒孔が3つ穿たれた「舟形木製品」が、「大足」の「下駄の部分」であるとして論が展開されている。この「舟形木製品」が大足の足板に相当するとする木下説に近年秋山造三氏（秋山 1993）等が疑義を提出している。拙論も後述するが、山木遺跡で出土した「舟形木製品」は、輪カンジキ型田下駄の足板である説をとる。輪カンジキ型「田下駄」と称するように、緑肥踏み込みや代掻きといった大足の機能ではなく、水田内で足が沈まないようにするという田下駄の機能を有する点をここでは強調しておきたい。いずれにせよ、木下氏の大足・田下駄研究で、この領域の研究は飛躍的に前進した。田で履く下駄には田下駄と大足があり、機能を別にする、また田下駄にも形態的な差異が確認できること、田下駄が湿田用の農具であること、大足の使用は代掻きの技術導入を意味し、それが田植えにつながることを説いた点で古代の農業技術論の進展に大きく寄与したものである。

山木遺跡の資料も含め、静岡県葦山町の5遺跡より出土した田下駄及び「大足」151点について論じたのが斎藤宏氏である（斎藤 1967）。斎藤氏は田下駄を4「型式」、「大足」を3「型式」に分けている。田下駄の「第1型式」は横長板状で4孔が穿たれたもの、「第2型式」は横長板状、4孔があり足台の隆起があるもの、「第3型式」は縦長板状で3孔が穿たれたもの、「第4型式」は「U字形側壁つき」つまり足囲い状の足台隆起があるものである。そして、「時間的差を実証する伴出土器、地層・出土地などの資料は皆無であるが」と述べた後、「第1型式から逐次進化し、第3型式に及び、その後釘の出現により・・・ナンバに進んだものと推定される。」としている。この「逐次進化」の根拠、実態、年代観が不明なのが気にかかる論の展開である。「大足」は「平面舟形で両端の加工が欠失あるいは明らかにみとめられないもの」と「両先端にT字状の突起のあるもの」と「両端にほぞ穴や凸凹の細工のあるもの」との3「型式」に分け、復元形は大型長方形の枠が組み合わせられると想定している。斎藤氏はこの「大足」の機能について、「苗しろ」専用のものでなく、田植え前の代掻き全般に用いたことを指摘している。が、緒孔が3つ穿たれた舟形木製品が、長方形枠型の大足の足板になるとの前提で論が進められており、その後のこの種の木製品の盲目的な「大足」との規定に先鞭をつけたものと考えられる。その意味において、この宮下遺跡の報告書はその後の「大足」、輪カンジキ型田下駄研究にとって大きな障壁となったことは確かである。

兼保明氏は登呂遺跡、山木遺跡及び畿内の数遺跡の田下駄、大足の資料を集成し、分類を試みている（兼保 1985）。兼保氏は田下駄、大足を総称して「田下駄」と呼び、「a ナンバ（単純横長多下駄）」、「b 輪樑付きナンバ（輪樑付き横長田下駄）」、「c 狭義のタゲタ（単純縦長タゲタ）」、「d オオアシ（輪樑付き型、杵付き縦長田下駄）」の4種に分けている。aのナンバは弥生時代前期（Ⅰ期）に大阪府八尾市恩智遺跡より出土例があり、初期農耕段階での田下駄の使用を指摘している。bの「輪樑付きナンバ」は滋賀県新旭町針江北遺跡、同町森浜遺跡で確認されたことにより、輪カンジキ型になる田下駄を板状田下駄と別系統の田下駄として分類した。これは輪カンジキ型田下駄を板状四孔の田下駄と同一機能でありながら、輪カンジキ型という組合せ式の田下駄を形態的に分けて論じた点重要である。ただ、ここでこの輪カンジキ型の足板を横長にしているが、針江北遺跡のものは明らかに縦長になるものである。dの「オオアシ」は杵型大足の足板として並べたものであるが、鳥取県池ノ内遺跡出土のものは、その後の出土例でも確認できるように輪カンジキ型田下駄の足板になるものである。後述するが、筆者はここに並べられたdの「オオアシ」は、すべて輪カンジキ型田下駄の足板になるものとする。兼保氏はdの「オオアシ」としたものに輪が付くものもあり、機能的に「ナンバ・タゲタ」なのか「オオアシ」なのか不明であるとし、「オオアシ中でも比較的足板の短い輪樑型のものについては、ナンバやタゲタのような湿田での作業に用いられた可能性がある。そのため、比較検討の素材として、関連する民俗学や民具の研究成果をも学ぶとともに、時代に特定されず弥生時代から現代までの変遷過程を的確にとらえる視野が必要である。」と説く。

田下駄、大足研究で従来硬直した杵組を打破したのが、秋山浩三氏の「『大足』の再検討」（秋山 1993）という論考である。秋山氏の最大の論点は木下氏、斎藤氏が山木遺跡の「舟形木製品」を大足の足板としたものが、本来は輪カンジキ型田下駄の足板であったという点に集約される。近年、京都府鶏冠井清水遺跡で古墳時代後期の輪を伴った田下駄の出土例が確認され（向日市埋文センター 1992）、その推定復元を試みることで、従来「大足」の足板として報告された一群の木製品が輪カンジキ型田下駄であったことを実証している。静岡県内でも瀬名遺跡、川合遺跡から輪、横木を伴った輪カンジキ型田下駄が確認されており、秋山氏の説を補強している。また秋山氏は田下駄（秋山氏は田下駄を田で履くものを総称して用いている。）の名称と分類を民俗学で用いる分類名称を援用しながら検討している。田下駄を大別して三型式に分けている。1つは杵なし型式で、従来の板状の4孔または3孔の田下駄であり、2つには円形杵付き形式、つまり輪カンジキ型田下駄であり、3つには方形杵付き形式つまり梯子杵付き大足である。筆者も輪カンジキ型田下駄の確認例が増加した現在、従来「大足」の足板と読んでいたものか、ここでいう2つ目の円形杵付き形式になったことから、この三形式の設定に賛成したい。ただ、田下駄の総称の中、大足という別機能のものまで杵なし形式と円形杵付き形式の分類と同レベルでの分類は問題がある。別機能である大足と田下駄をまず第1の形式分類にもっていきたいのが筆者の考えである。また、各形式内をいくつかの型に分けている。たとえば杵なし形式は「四孔縦型」「四孔横型」「三孔縦型」の3つに分けているが、模式図で見る限り、四孔縦長の中に明らかに四孔横型同系列のものが含まれており、「四孔縦型」と「四孔横型」とを分けることに必要性を見いだすことができない点もある。これらの点については、瀬名遺跡の田下駄の分類試案のところで詳述する。

次に民具研究において扱われてきた田下駄の研究を瞥見してみたい。田下駄の民具調査、研究は戦前において既に『民具問答集』（アチックミュージアム 1918）で全国規模の調査が唱えられ、地域的な調査研究としては、『静岡県方言誌 民具篇』（内田武志 1921）が刊行されている。特に『静岡県方言誌』では256点もの田下駄、大足を静岡県内から収集し、整理記録している。図は模式的なものになっているが、形態を十分表現しており（サイズが不明なところがあるが）、全国的に確認できる杵型大足、輪カンジキ型田下駄、板状3孔田下駄、板状4孔田下駄等各種の基本型がほぼ図示されている。そして、

名称、使用地、田下駄の構造、用途、用いられる水田の土壌等も記録されている。水田の戦後の水利灌漑事業が施行される前、農法の機械化の前段階の資料として重要である。

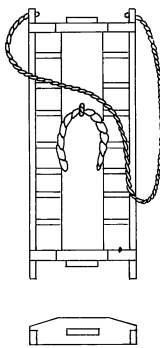
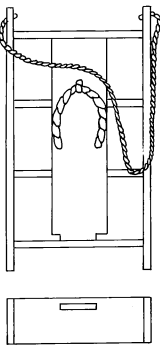
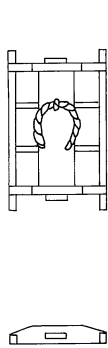
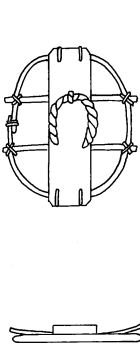
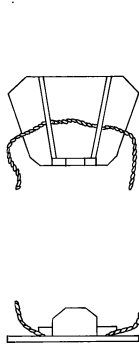
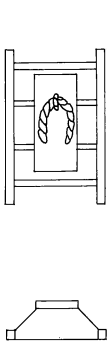
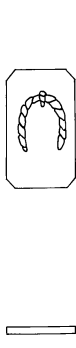
戦後、田下駄、大足の資料が各地域ごとにまとめられ報告されてきた。潮田鉄雄氏は1964年に「千葉県の田下駄」(潮田 1964)を発表し、続いて「続千葉県の田下駄」(潮田 1966)、「茨城県の田下駄」(潮田 1968)と霞ヶ浦周辺に分布する田下駄について長年研究、報告してきた。特に「千葉県の田下駄」で示された分類は、全国の田下駄、大足を形態上分類する規範を示している。1 杵型大形類、2 杵型小形類、3 輪櫟型類、4 下駄型類、5 足駄型類、6 板型類と6分類している。機能を念頭に入れた妥当で普遍的な分類であろう。箱型大足がこれに入れば特殊事例を除いて民具の大足、田下駄は概ね包含することになるであろう。ここで注目すべきことは6分類した形態には、その形態に相応しい機能があり、それがまとめられていることである。1の「杵型大形類」は「代踏みに使用している杵型の大型の田下駄で手持縄を装着したもの」、2の「杵型小形類」は「稲刈りに使用している杵型の小形の田下駄」、3の「輪櫟型類」は「稲刈りに使用している輪櫟形の田下駄」、4の「下駄型類」は「芦刈り、菰刈り等に使用されている」下駄であり、5の「足駄型類」は「水の出た田の稲刈りに使われ」た田下駄であり、6の「板型類」は「稲刈りに使用された」田下駄である。1と2の形態差と機能差の整理はこの潮田氏の整理を基本としたい。また潮田氏はその分布構造、材質、製作技法についても記録、報告している。杵型大足の構造については全長(縦)、全幅(横)、全高、足板幅を計測して、使用地、機能との関係をも考察している。潮田氏は長年の霞ヶ浦周辺の田下駄研究成果を踏まえ「田下駄の変遷」(潮田 1967)を示している。ただ詳細な追跡調査の故か、12に細分類を示し、その細分に基づいた形態上の変遷をも図示している。考古資料では、この変遷に合わない事実が次々と提示されており、この変遷図は現在では有効性を持ち得ない段階に来ている。⁽³⁾

中村俊亀氏は「シロフミ田下駄の諸系列」(中村 1976)の中で長方形田下駄を4つに分類している。杵型の大型、杵型の中型、杵型の小型、箱型の4種である。各々の型について事例を報告しつつ、その機能を整理しているが、潮田氏の説いた杵型の形状のものは大型が大足の機能、小型のものが田下駄の機能のものと単純に分離できないことが了解できる。中間的な大きさの杵型のものは、大足として緑肥踏み込み、代掻きに使われながらも、稲刈りの時足が沈まないようにも用いられるということである。

神野善治氏は静岡県の富士市と沼津市に広がる浮島沼周辺の湿田農耕の調査研究により、湿田農耕の中での農具としての田下駄、大足の位置づけを整理している(神野 1979)。低湿地の水田稲作農法を事例を用いまとめ、その中における道具の形態と機能を整理している。田下駄、大足の農事暦内での実態的位置づけが可能になった研究である。橋本武氏は猪苗代湖周辺の湿田地帯に分布する田下駄、大足の使用法を整理して報告している(橋本 1982)。佐々木長生氏は福島県会津若松市の門田条里制跡より出土した田下駄について、民具研究の成果と、『会津農書』をはじめとした近世農書研究の成果を用いて考察している。門田条里跡出土の「大足の足板」を「刈敷踏みに使用した『大足』で輪櫟型の大足」となるとしているが、いかなる根拠で「大足」としたか不明である。いずれにせよ、民具研究の成果と考古資料の成果とを近世農書の記載内容の手助けを受けながら結びつけることの意義があろう。市田京子氏は広島県の民具の田下駄を集成し考察している。集成に際し、形態分類として簀の子型、杵大型、杵小型、箱型、下駄型、輪かんじき型の6種に分けている。今までの湿田という視点からの田下駄の検討だけでなく、ここでは寒冷地での耕作効率から残穢処理を含めた施肥作用としての大足の使用をとらえている。また、箱型は新出のものとし、短冊型苗代の施肥に必要として出現したという。田下駄、大足の機能と形態についてより水田稲作技術との深い関連の中での検討が今後必要とされる期待がある。

以上、民具研究においては、大足と田下駄は不可分のものとして、「田下駄」と総称して検討される

傾向にあったことが了解できる。しかし機能分類を念頭におく分類において「大足」と「田下駄」は名称の上でも使い分けたい。筆者が民具を瞥見したとき機能分類を念頭においた形態分類は第39図で示した。これは前述の潮田氏の6分類に箱型大足を加えたものが基本となっている。1) 杵型大足、2) 箱型大足、3) 杵型田下駄、4) 輪カンジキ型田下駄、5) 横長板状田下駄、6) 高下駄型田下駄、7) 下駄型田下駄の7種である。機能を整理すると、1)の杵型大足は大足の本来的機能である緑肥踏み込みと代掻きの機能がある。2)箱型大足は緑肥踏み込みが専らの機能である。3)杵型田下駄、4)横長板状田下駄、5)輪カンジキ型田下駄は稲刈りの作業を中心に水田に足が沈まないようにするために履くものである。6)高下駄型田下駄は3)、4)、5)と同様に足が沈まないために履くが、特に出水時に履くものである。7)は下駄型田下駄で、稲刈りにも用いられるが、ヨシ刈り、畦歩き、開墾する時、ヒエトりの時などに履くものである。株間や畦など幅狭い所を歩く時に用いる。

1) 杵型大足	2) 箱型大足	3) 杵型田下駄	4) 輪カンジキ型田下駄	5) 横長板状田下駄	6) 高下駄型田下駄	7) 下駄型田下駄
						
緑肥踏み込み 代掻き	緑肥踏み込み 代掻き	稲刈り等に足が 沈まないように 履く	稲刈り等に足が 沈まないように 履く	稲刈り等に足が 沈まないように 履く	強湿田、冷水帯 で足が沈まない ように履く	湿地の開墾、ヒ エ取り、畦の上 を歩る

第39図 田で履く下駄 民具分類模式図

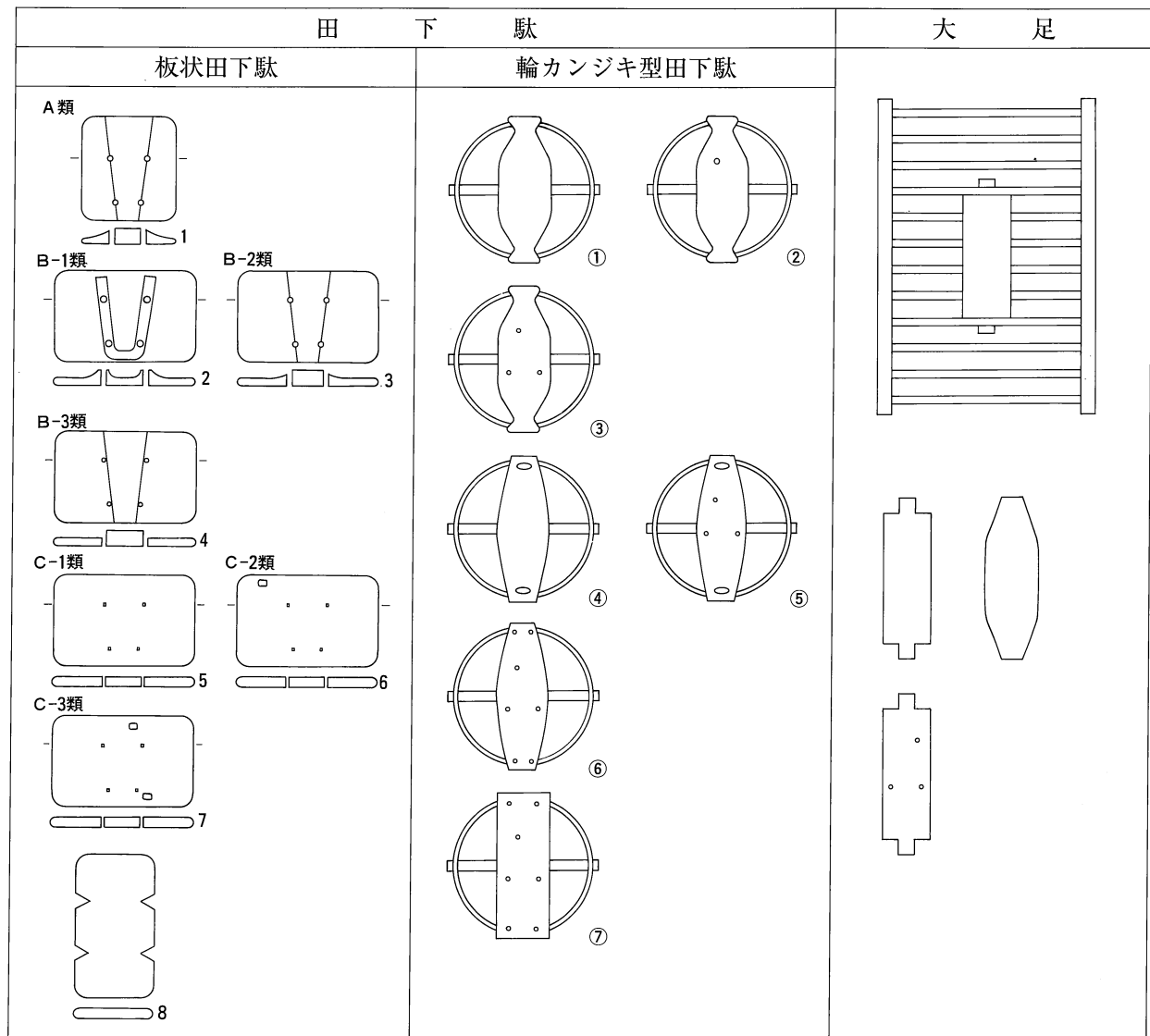
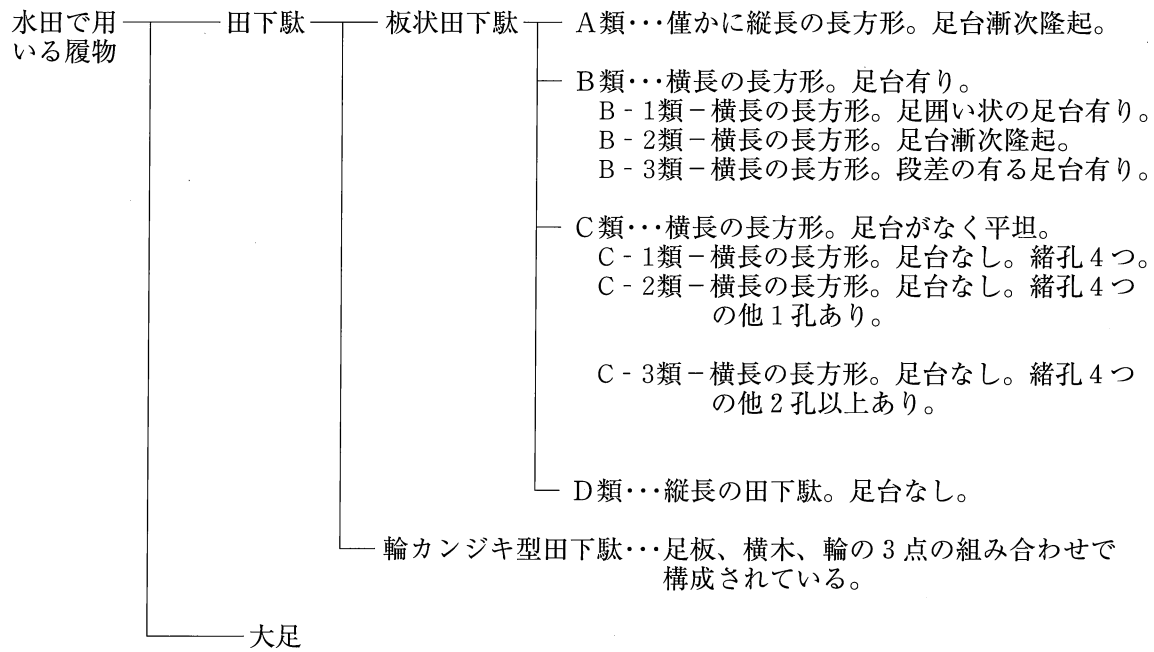
3 瀬名遺跡出土の田下駄

瀬名遺跡出土の板状田下駄178点及び輪カンジキ型田下駄30点の個々の出土状況及び形状は本文を参照していただきたい。ここでは本文と若干重複するが、瀬名遺跡出土の田下駄の形態分類をし、その形態的特徴を明記したい。大足と田下駄を分類する概念も含め、下のよう分類してみた。

水田で用いる履物は、まず機能で2つに大別できる。稲刈りの時などに足を浮かせるために履く田下駄と、緑肥を踏み込んだり代掻きのときに用いる大型で杵状になった大足とである。田下駄は形態の大きな差異により、板状の田下駄と輪カンジキ型田下駄に分けることができる。板状の田下駄は1枚の板を整形して孔を穿って出来ている。輪カンジキ型田下駄は足板と横木と輪の3点の部材を蔓状繊維で緊縛した組み合わせの田下駄である。この構造上の差異は後述するが、時代差に直結する重要な差異である。板状の田下駄は4つに分類できる。平面形が若干縦長の長方形を呈し、足台が左右両端から中央の足がのる平坦面に向かい漸次隆起している田下駄がA類である。平面形が横長の長方形を呈し、足台を有している田下駄がB類である。平面形が横長の長方形で、足台隆起がなく平坦な田下駄がC類である。縦長で足台がなく平坦な田下駄をD類とした。

B類は足台の隆起の仕方により3つに細分した。B-1類は足台が足囲い状をしているものである。B-2類は足台が左右両端から中央の足がのる平坦面に向かい漸次隆起するものである。B-3類は足台

第34表 田下駄分類



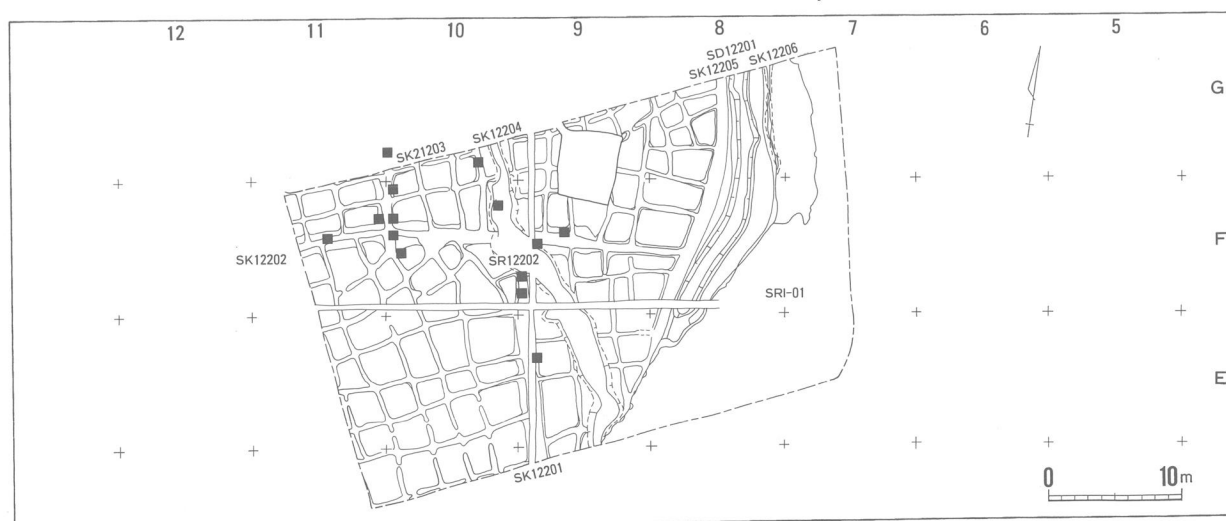
第40図 田下駄の分類模式図

が段差を設け強調されているものである。C類は足台のない平坦な横長の田下駄を穿孔の数により3つに細分した。通常の4つの緒孔だけのものをC-1類とし、4つの緒孔に1つの孔が別に穿たれたものをC-2類、別に穿たれた孔が2つ以上のものをC-3類とした。B類とC類のこれら3つの細分は、当初、時間差、機能差を期待した。後述するが、B類を3つ細分することは、時間差に関連することが了解でき、この細分が有効であることが確認できる。が、C類の3つの細分は、機能差、時間差を期待したが、4孔以外の孔に規則性が見られず、むしろ建築材の壁材を転用したために4つ以上の孔があるとき⁽⁴⁾考えることができ、このC類を細分したことには意義を見いだせずにいるのが現状である。

輪カンジキ型田下駄の分類については、ここでは明記しないことにする。第40図の模式図で示すように足板の形状で6つぐらいに形態分類が可能であるが、足板の形状だけで分類することに現段階では意義を見いだせないのが実状であろう。ただ、瀬名遺跡出土の輪カンジキ型田下駄の足板の形態は時期によって変遷することが確認できる。しかし、同じ巴川水系で、長尾川を隔てただけの川合遺跡八反田地区の輪カンジキ型田下駄の様相は瀬名遺跡の変遷が全く当てはまらないことより、ここでは普遍性をもつ分類としては示さないことにする。

次に田下駄の出土状況を瀬名遺跡で検討してみる。特に水田遺構との関係に注視してみたい。以下、瀬名遺跡で田下駄が多数(13枚以上)確認できた水田跡を6面抽出して検討した。各面毎に田下駄の出土地点を点描し、その遺構を含めた全体図を示した。

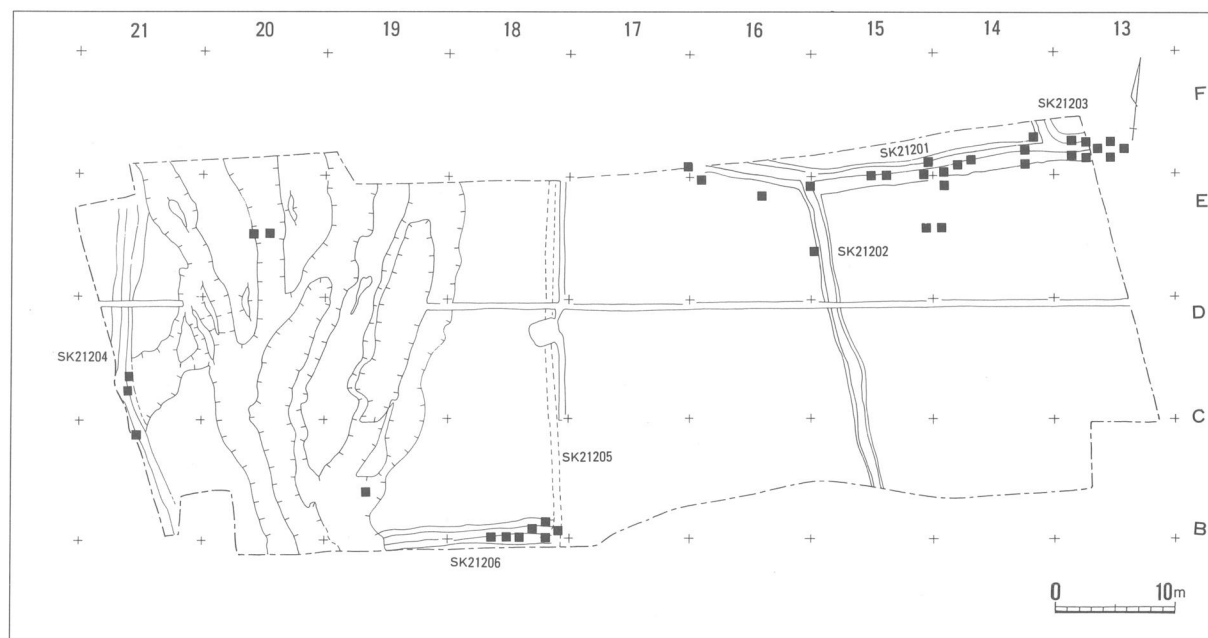
1区の22層水田は弥生時代後期から古墳時代前期の時代幅のある水田である。調査区中央に北北西から南南東へ貫流する溝、及び調査区東端は大河道跡の左岸が検出されている。この大河道跡の左岸に小区画水田が全面に確認されている。東西方向1本、南北方向5本の杭列を伴う大畦畔と畦の幅40~50cmの小畦畔とによって区画された水田である。畦畔の盛土内より多数の木製品及び土器片が出土しており、木製品としては、二又鋤、四本鋤、田下駄、梯子等が特に大畦畔内より出土している。板状の田下駄は計16点出土している。第41図22層水田田下駄出土位置図で確認できるように、SD12201内で1点出土している以外すべて、大畦畔内より出土していることが特筆できよう。東西方向のSK12202を中心に南北方向のSK12203、SK12204、SK12201の5本の大畦畔が交錯するところから出土している。特にSK12202とSK12203との交差点付近は田下駄が集中して出土したと言える。この16点の形態についてはB-2類1点、B-3類2点、C-1類11点、C-2類が1点であった。C-1類が卓越しているのが了解できる。



第41図 1区22層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

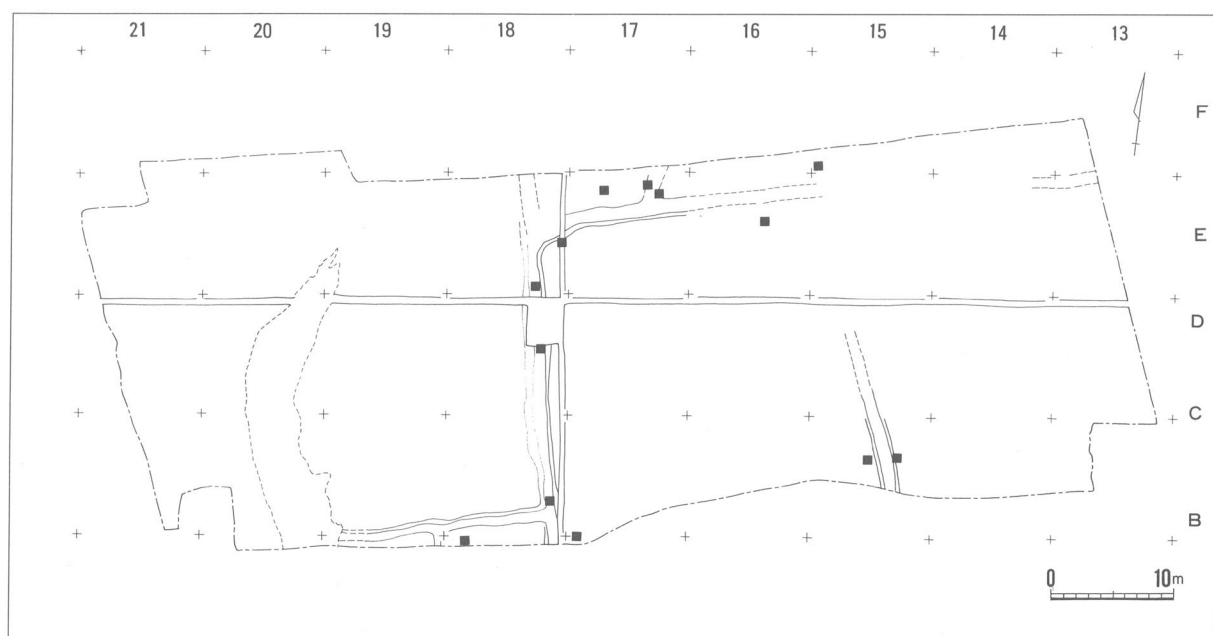
2・3区の12層水田は、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての水田跡である。大区画の畦畔により区画されており、畦畔にはいずれも杭や横板が伴う。東西方向の大畦畔2本、南北方向の大畦畔4本が検出されている。調査区の西側は10層の段階の流路跡により、削られている部分がある。この田面より二又鍬、三又鍬、剝物、樋状木製品などと伴に44点もの板状田下駄が出土している。田下駄は西側の流路跡より3点出土しているが、他はすべて大畦畔内より出土している。特に東西方向のSK21201内より25点もの田下駄が確認されている。東西方向のSK21206からも7点出土している。田下駄はB-2類が5点、B-3類が4点、C-1類が30点、C-2類が2点である。B-2、B-3類は少数であるが、C-1類が多数を占める。



第42図 2・3区12層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

2・3区14層水田は弥生時代後期前半にほぼ時代確定できる。東西方向の2本、南北方向4本の大畦畔

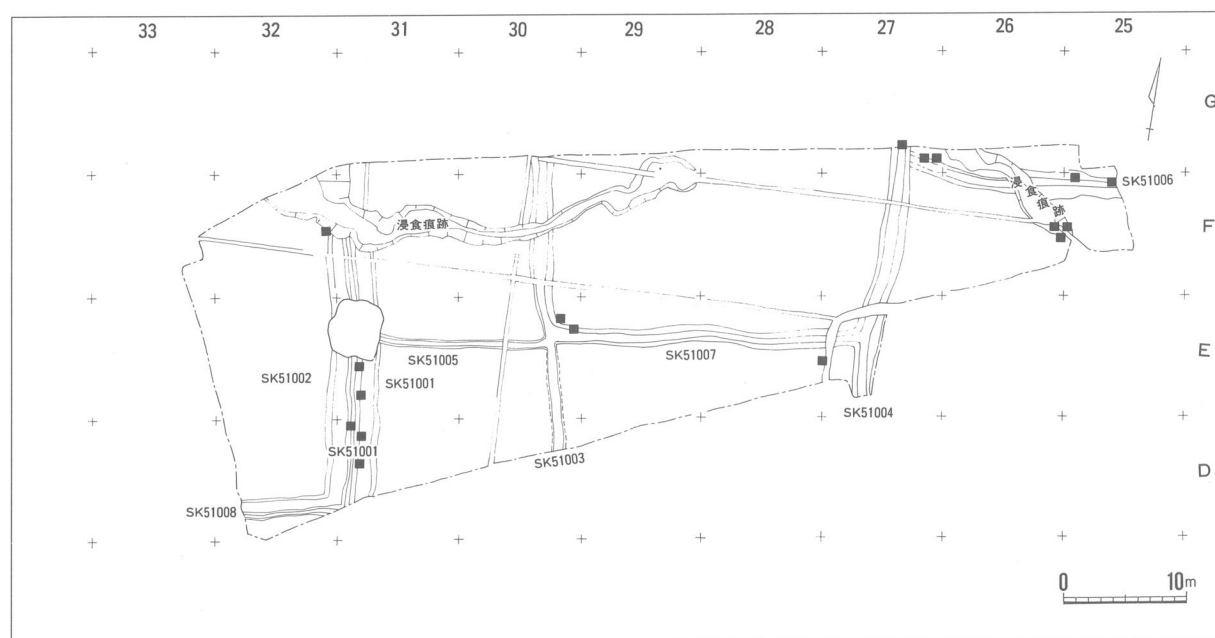


第43図 2・3区14層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

により区画されている。12層ほどではないにしても、14層のこれらの大畦畔にも杭が打たれ、横板が敷かれていた。やはり、大畦畔内には、多数の木製品が埋め込まれており、狭鋤、三本鋤、梯子などと共に13点の板状田下駄が確認されている。13点ともすべてほぼ大畦畔内より出土したと考えてよいであろう。南北方向の畦畔のSK21401、SK21404、東西方向の畦畔、SK21403、SK21402から出土している。13点の田下駄のうち、A-1類が3点、B-1類が5点、B-2類が3点、B-3類が2点であった。A-1、B-1類という弥生時代中期に出現し、弥生時代後期前半に消滅してしまう田下駄が大半を占める状況である。逆にC類が全く検出されていない。A-1類、B-1類という古いタイプの田下駄が主流を占め、後期後半から古墳時代前期に主流を占めるC類が、ここでは全く見られないことは、瀬名遺跡の田下駄の形態変遷を追うときに重要な意味を持つ。

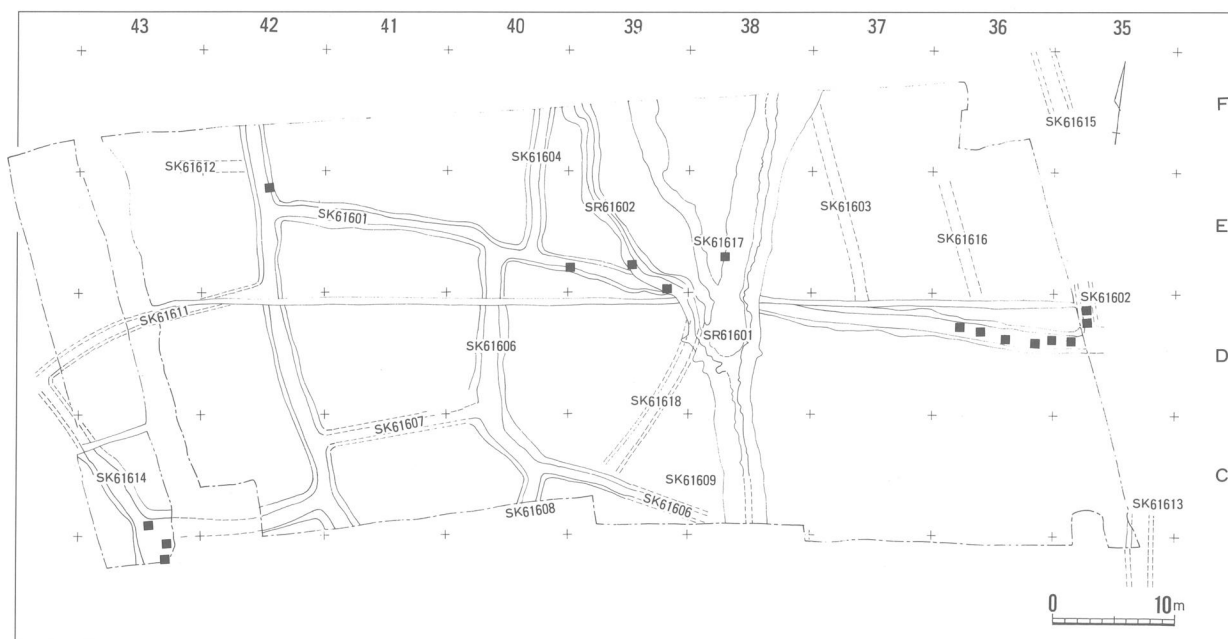
5区10層水田は弥生時代後期後半から古墳時代前期の時期幅に収まる。東西方向3本、南北方向4本の大畦畔によって区画された水田跡が検出されている。畦畔内より二又鋤、三又鋤、舟形、曲物、梯子などの木製品と共に田下駄が19点出土している。田下駄は南北方向のSK51002、SK51001、東西方向のSK51007、SK51006内より出土している。SK51006を削っている浸食痕跡内より3点ほど出土しているが、元来はSK51006内にあったものと考えられる。SK51002とSK51001はSD51001を挟んだ並行の畦畔であり、このSD51001付近に田下駄は集中する。19点の田下駄のうちB類は1点、B-3類が確認されているだけで、他はすべてC類である。特にC-1類は15点を数え、C-2類、C-3類は各々1点である。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけてC-1類が卓越することは、瀬名遺跡では普遍的にとらえられる傾向である。



第44図 5区10層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

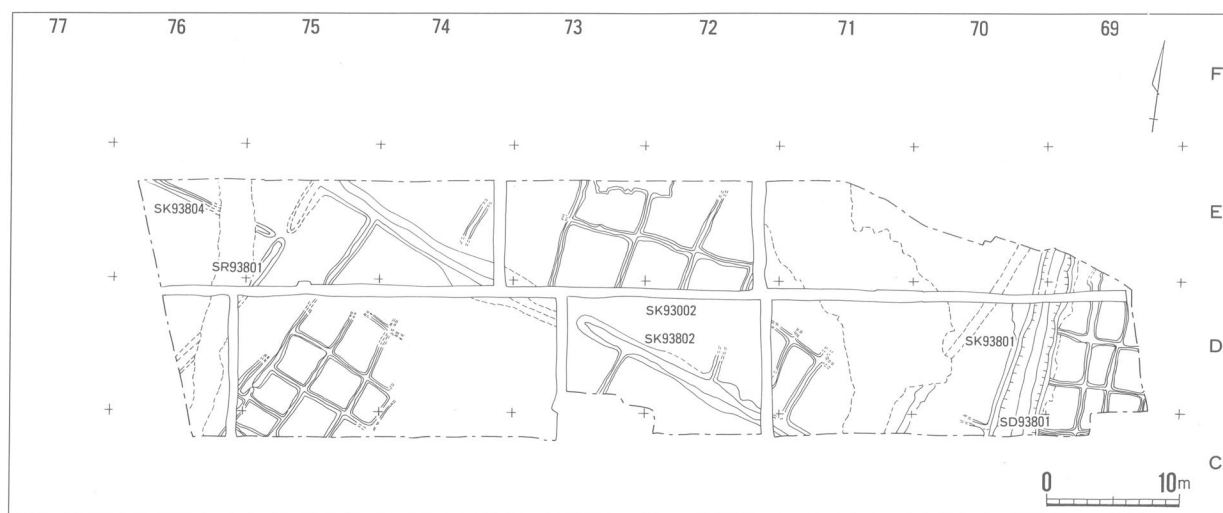
6区16層上面では、弥生時代後期から古墳時代前期の水田跡が検出されている。大畦畔により区画された水田であるが、畦畔は概ね南北と東西に走るが、畦畔で区画された田は不整形の四辺形を示している。大半の大畦畔には、杭、横板が密に打ち込まれていた。二又鋤、四又鋤、刳物、鼠返し、梯子などと共に田下駄が16点検出された。16点中13点が東西方向の畦畔SK61601内より出土しており、他3点はSK61604とSK61609との交点付近より出土している。形態的には16点中、B-2類が6点、B-3類が1点、C-1類が8点、C-2類が1点である。この16層での水田耕作が弥生時代後期前半から始まっているとすると、首肯できる形態のパラツキである。



第45図 6区16層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

9区38層水田は弥生時代後期から古墳時代前期の時期幅が考えられる。大畦畔により区画された内に小畦畔で小さく区画された水田跡が確認されている。大区画は調査区中央を東西に走るSK93802を中心に、それに直交する南北方向のSK93803、SK93801がある。田下駄は計17点出ており、出土位置が確認できるのは、うち14点でこの14点はいずれも大畦畔付近より出土している。特にSK93801の北端部よりは10点が集中して出土している。17点の田下駄の形態はB-2類が1点、C-1類が10点、C-2類が4点、D類が2点である。大半がC類で、D類が2点確認できることに注視したい。



第46図 9区38層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

以上板状田下駄が多数出土した水田遺構における田下駄の出土状況を見た。ここで、確認しておきたい点が3点ある。第1点は2・3区の14層水田（弥生時代後期前半）に伴った田下駄の形態と12層水田（弥生時代後期後半から古墳時代前期）のそれとは明瞭な形態差があるということである。12層水田の田下駄の形態はここで確認した1区22層、5区10層の同時期の田下駄と似ることも了解できた。これは次で詳述する瀬名遺跡における田下駄の形態変遷に直結する事実である。第2点は田下駄が大畦畔内またはその付近での出土が大半であるということである。検討した6面の水田面のうちすべての面におい

と言える事実である。溝内の出土や田面中央部の出土などは殆どなく、大畦畔内かその付近で出土している。1区22層水田と9区38層水田では、小区画の小畦畔が多数確認されているものの、これら小畦畔内の出土はなく、この2面においても専ら大畦畔内の出土に限定できる。第3点はすべての大畦畔において、田下駄が出土しているのではなく、1つの田面においても限られた大畦畔において田下駄が集中して出土しているという事実である。2・3区の12層水田、5区10層水田、6区の16層水田、9区の38層水田は特に顕著であり、調査区を縦横に走る大畦畔ではあるが、田下駄はその大畦畔の限定された数本の大畦畔に出土が限られている傾向を読みとることができる。



写真1 S K51006 田下駄 出土状況



写真2 8区14b層 W-337. 338 343 出土状況



写真3 9区 W-1612 1611 9区 W-1613 1614 出土状況

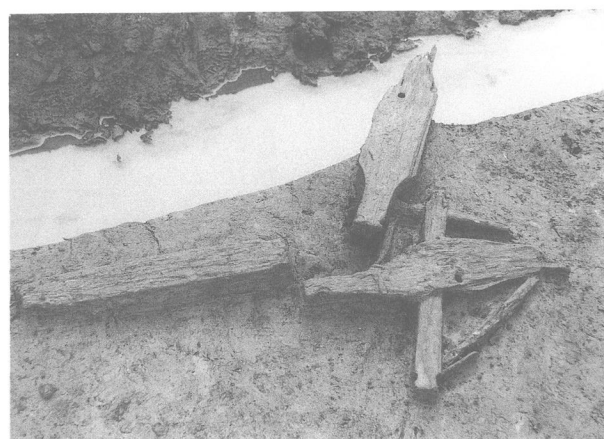


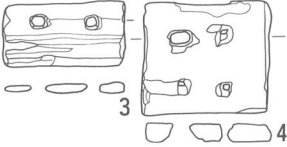
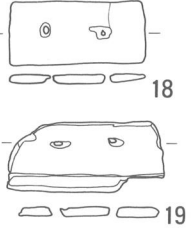
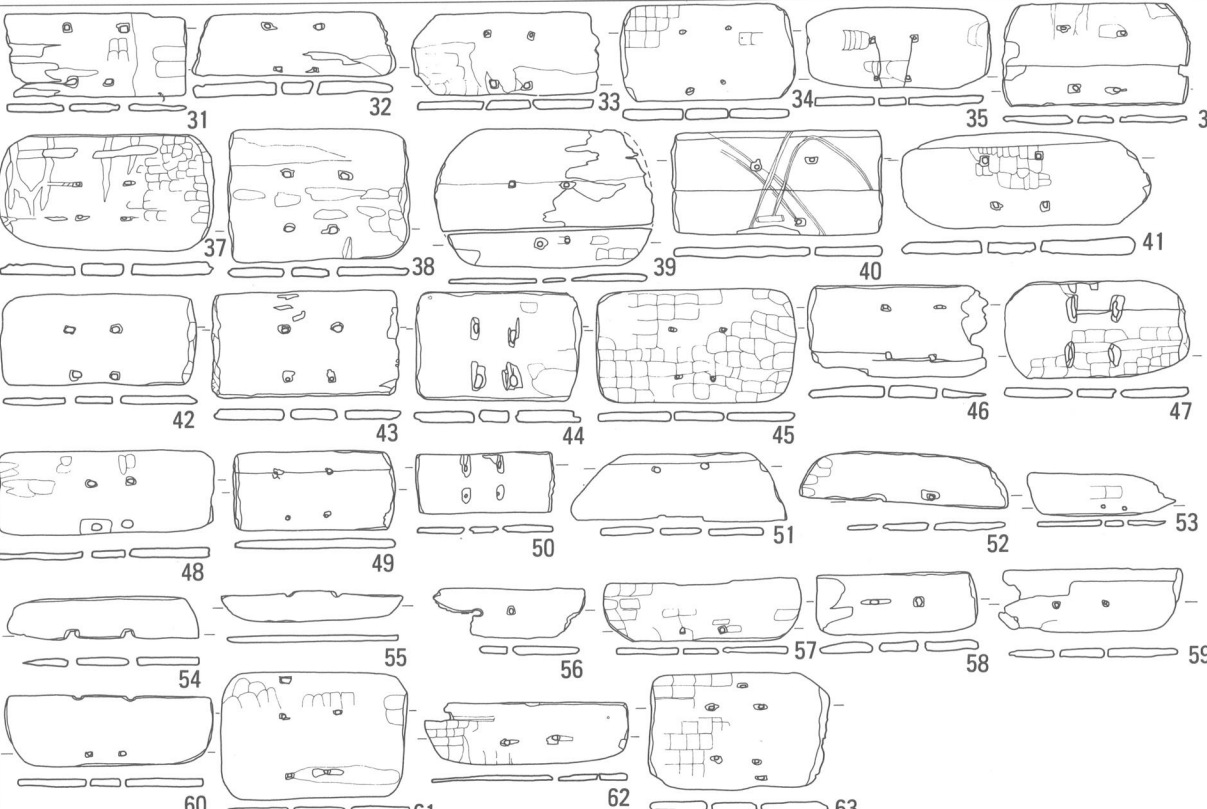
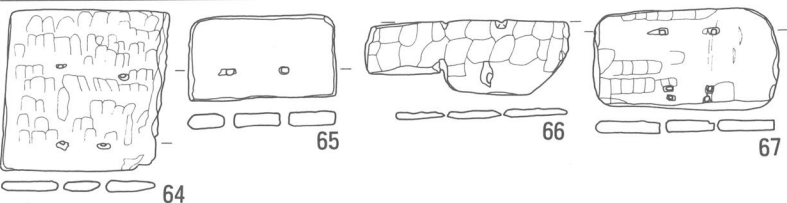
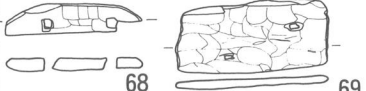
写真4 10区30層 W-614 615 616 出土状況

4 板状田下駄の形態変遷

瀬名遺跡出土の田下駄178点の出土状況を検討してみると、中には出土層位の関係上、所属時期に幅をもたせないといけないものと、短い時期に限定できるものがある。特に板状田下駄の所属時期としては次の5つの時期を設定してみた。1) 弥生時代中期後半、2) 弥生時代後期前半、3) 弥生時代後期後半から古墳時代前期、4) 古墳時代中期、5) 古墳時代後期の5時期である。これは瀬名遺跡のこれらの時期における水田遺構が確認できたことから設定できた5時期である。が、調査区によっては、弥生時代中期から古墳時代前期までの土器片が連続した層、遺構の中で確認できるところもあり、必然的に田下駄がこれら5時期のどこに属するかについては慎重な検討を必要とした。各調査区の遺構の年代を再

弥生時代中期後半	
弥生時代後期前半	
弥生時代後期後半～古墳時代前期	
古墳時代中期	

第47図 瀬名遺跡の板状田下駄の編年図

	弥生時代中期後半
	弥生時代後期前半
	弥生時代後期後半 ～古墳時代前期
	古墳時代中期
	古墳後～

第48図 瀬名遺跡の板状田下駄編年図

び出土土器よりチェックし、178点の板状田下駄を検討した結果、5時期に分けて時期設定できるものは、69点であることがわかった。他の109点に関しては時期幅を長く持ってしまう、5時期に分けることが不安なため外した。69点に関してはすべて第47図、第48図に示した。

69点を5つの時代別に分け、先述したA・B・C・D類の別を縦軸にとって示してみた。1、2、5、6、7は縦長で、足台が漸次隆起するタイプ、A類の田下駄である。1、2は典型的なA類の形態を示すもので、また、2・3区の16層水田という弥生時代中期後半の良好な資料として注目されるものである。8、9、10、11、12はB-1類に属する田下駄で、横長であり、足台は漸次隆起し、足囲い状を呈する。8は典型的なB-1類の形状を示す完形品である。5点と数は少ないが、形態的には似たものばかりで、定型化している様子が窺える。13、14、20、21、22、23、24はB-2類で、横長であり、足台部が漸次隆起する田下駄である。13、14は2区14層で近接して出土した資料で、同一工人による製作が想定できるものである。これら7点は足台の隆起の仕方はある共通性があるものの、平面形は長方形あり、隅丸長方形あり、台形あり、扇形ありと千差万別の感がある。15、16、17、25、26、27、28、29、30はB-3類に属し、足台は段差状に強調して設けている一群である。15、16、17は25、26、27、28、29、30に比して平面積が明らかに小さく、前孔が前の端部に近く穿たれている。やはり平面形にはバラエティがある。3、4、18、19、31~60、64、65、66はC-1類に属し、足台がない板状の平坦な田下駄である。平面形は本文で分けたように、正方形、長方形、隅丸長方形、小判型、楕円形、円形などの形状があり、定型化した平面形を示さない。61、62はC-2類で、平坦な田下駄であり、緒孔の4つ以外に1孔別に穿たれている。63、67はC-3類としたもので、緒孔以外の孔は定まった位置に穿たれておらず、61は壁板材の転用のための孔とも考えられたり、67に関しては、後孔の穿ち直しのための別の2孔とも考えられ、緒孔以外の孔の機能は定まったものとは考えにくい。68、69は田下駄と断じれず、孔の穿ち方、平面形いずれも古墳時代中期までのそれとは違い、変則である。

板状田下駄の形態別の消長をしてみる。A類は弥生時代中期後半に丁寧な作りで形態的にも整ったもので出現する。瀬名遺跡においては、この時期が明確な水田区画を捉えられる最も古い時期であり、木製農耕具もこの時期に出現しているのが確認されている。静岡の初期農耕に伴う田下駄は、このA類とC-1類である。このA類は弥生時代後期前半まで続くが、そこで消滅してしまうようだ。B-1類は瀬名遺跡の確実な資料だけから判断すると、弥生時代後期前半にのみ見られる形態の田下駄である。B-1類に似た形状のB-2類は、後期前半に現われ、後期後半から古墳時代前期まで続く。後期前半から古墳時代前期になると平面積が大きくなり、平面形も多様化する。その傾向はB-3類も同様である。

第35表 田下駄形態別の消長表

	弥生時代中期 後 半	弥生時代後期 前 半	弥生時代後期後半 から古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期 ～
A 類	←————→	————→			
B - 1 類		←————→			
B - 2 類		←————→	————→		
B - 3 類		←————→	————→		
C 類	←————→				————→

B-3類もやはり後期前半は小型で定型化しているが、後期後半から古墳時代前期になると、大型で平面形が乱れる。B-2、B-3類はこの古墳時代前期で終焉する。足台がある田下駄、つまりA類、B類の田下駄は、この古墳時代前期に消滅してしまう。

C-1類は初期農耕段階の弥生時代中期後半から出現しており、古墳時代中期までは確実に残る。特に弥生時代後期後半から古墳時代前期に飛躍的に卓越し、その数を増す。やはり、平面積はこの時期大きくなり、平面形も多様である。古墳時代中期になると、数は減り、形態も乱れ、穿孔位置すら定まらず乱れる。古墳時代後期以降になると、明瞭に板状の田下駄と呼べるものがなくなる。C-2類、C-3類は資料不足のため、ここでは言及しない。形態別の消長も時期差が捉えられ重要である。同じ形態の田下駄においても、弥生時代後期前半までは平面形態はその形態の中で定型化しているのだが弥生時代後期後半から古墳時代前期になると平面積が大きくなり、平面形が乱れて多様化することが重要と考える。

またここで押さえておきたいことは、板状田下駄は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて最も頻繁に用いられるようだが、ほぼ古墳時代中期には消滅してしまう事実である。板状田下駄は何に置き替えられたのか検討するとき、輪カンジキ型田下駄の検討が必要になる。

5 板状田下駄の穿孔方法について

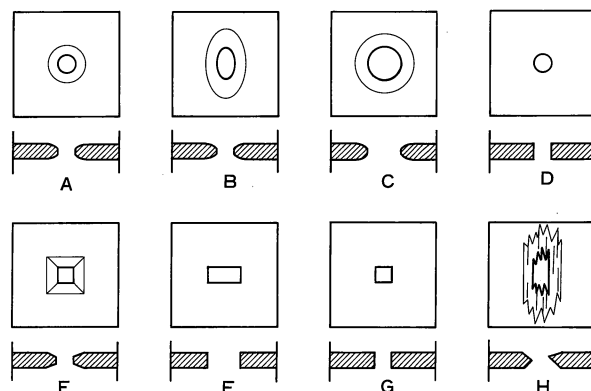
通常、板状田下駄には4つの緒孔が穿たれている。その4つの孔の位置については、後に詳述したいが、ここでは孔の穿ち方に差異が認められるため、その差異を検討し、穿孔道具の素材についての予察を述べてみたい。

木製品の加工痕を観察分析することによって、その加工具の形状、材質を想定しようとした研究には、管見で漏れがあろうが、山田昌久氏（山田 1984）と宮原晋一氏（宮原 1988）が取り組んでいる。特に宮原氏は木製品加工痕分析の限界を知らしめると同時に、鉄器にある加工痕の抽出がある部分では可能であることを指摘してくれている。木材の加工面で、斜角面または直角面において刃先痕が露出していない加工痕は、鉄器加工具と断定して良いという見解を示している。また刃先痕が切り取られていたりして残っていない場合や、露出している場合は、石器の可能性も含めて、断定は困難であるという限界性をも指摘している。その後の研究で宮原氏が示した限界性を越える研究はなく、木製品の加工痕分析は、そこで停滞しているのが現状であろう。

ここで検討する田下駄の緒孔の穿孔方法⁽⁵⁾についても明瞭に穿孔道具の材質まで断定しえるものではないことは、残念ながら事前に明らかである。しかし瀬名遺跡出土の田下駄において、時期限定可能な69点の穿孔の形態には差異が観察でき、その差異は穿孔道具の違いに直結するものと考えられる。ここで模式的に穿孔形態についてA～Hまで図示してみた。Aは円形の小孔であるが、実測図に示すと貫通している孔のまわりに稜線が巡るようになる。孔の断面は角がなく緩やかな曲線を描く。孔の穿ち方として、表面から穿ち、裏面からも穿っているのが観察できる。Bは楕円形の小孔であり、Aとほぼ似た技術によって穿たれている。楕円形になってしまうのは、穿孔道具の刃幅が影響しているのであろうか。Cは円形でAに比して大きく穿たれている。貫通部分で直径2 cm以上もあるものもある。基本的な穿孔技術はA・Bと似る。Dは真円形の小孔である。垂直に直線的に穿たれている。Eは方形の小孔であるが、やや斜めに穿孔具が当たっているのか、上端に稜がつく。裏面、両側から穿っているのが観察できる。Fは長方形に穿たれており、刃は垂直に入っている。断面は角が直角になっている。Gは正方形の小孔に穿たれている。Fとほぼ同じ技術で穿たれている。Hは縦位に鋒がある直線的な刃物を当てて、無理矢理穿ったものである。表裏両側から同じように切り込み、孔を貫通させている。

これら8つの穿孔形態を、69点の田下駄の中で見てみる。Aの穿孔形態を有する田下駄としては、5、

7、8、19、42などを挙げることができる。Bの穿孔形態としては9、10、11、12、20、66などを挙げることができる。Cの穿孔形態としては3、6が典型であろう。Dの穿孔形態を示すものは、古墳時代までの田下駄にはない。これは輪カンジキ型田下駄のところで述べるが、この穿孔形態の孔を有する輪カンジキ型田下駄の足板は、古代には今のところ確認できず、民具資料の中では数多く確認できることにより、中・近世の時期の中で出現してくる穿孔技術であろうとしかここでは言えない。Eの穿孔形態としては1、2、4、13、14、15、16、17、18、



第49図 穿孔形態模式図

28、29、30、38、43、64などを挙げることができる。Fの穿孔形態としては63を挙げることができるであろう。Gの穿孔形態としては21、22、23、24、25、26、27、31、32、33、34、35、36、37、39、40、41、45、46、49、56、59、60、61、63などを挙げることができる。Hの穿孔形態としては44、47、50を挙げることができる。

これらの穿孔形態を有する田下駄の出現を確認し、表にしたのが第36表の板状田下駄穿孔形態の消長表である。CとEの穿孔方法は弥生時代中期後半の瀬名遺跡においては、初源的な田下駄から見られる技法である。あまり鋭利な刃物ではないことは確かであり、刃幅1cmほどの石製鑿状工具を用いて穿孔したと想定することができる。川合遺跡で出土している刃厚がある刃幅1cmほどの石製鑿を穿孔道具として想定したい。AとBの穿孔方法は弥生時代後期前半から出現する。Cよりは鋭利な刃物と考えられるが、それでも表裏両側から相当力まかせに穿孔している様子が窺われる。AとBの違いは平面形か円形か楕円かの違いだけで、穿孔技術としてはほぼ類似したものであろう。穿孔道具が石器か鉄器かは判別ができない。穿孔技術は弥生時代後期後半から古墳時代前期の田下駄から確認でき、F・Gは鋭利な刃幅の狭く、刃厚が薄い穿孔道具を用いている。それ故にほぼ垂直に小孔が穿てるのであると考える。H

第36表 板状田下駄の穿孔形態の消長表

	弥生時代中期	弥生時代後期 前半	弥生時代後期後半 ～古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期～
A		←			-----
B		←			-----
C	←				-----
D					←-----
E	←				-----
F			←		-----
G			←		-----
H			←		-----

は小刀状の鋭利な鋒のある刃物で切りつけ穿孔したものである。F・G・Hは鉄製穿孔道具によると考える。

以上より、穿孔道具に関しては弥生時代中期後半には、石製の鑿状加工具で穿孔しており、弥生時代後期後半から古墳時代前期には、明らかに鉄製の穿孔道具を用いていることが了解できよう。弥生時代後期前半はその過渡期とも位置付けられ、その後の弥生時代後期後半から古墳時代前期の明確な鉄器化の時期を際立たせているであろう。これは鉄器の出土例、前述の木製農耕具の組成の変遷とも関係し、静岡県における鉄器化への流れを物語る重要な事実の1つとして考えられるであろう。

6 輪カンジキ型田下駄の形態変遷

先述の秋山浩三氏は「方形枠付き形式」の「田下駄」は「各材が原則として杢孔結合で組み立てられる」とし、山木遺跡出土の有頭状舟形木製品は「方形枠付き形式」の大足の足板ではなく、「円形枠付き形式」の「田下駄」としている。静岡県内の大足、輪カンジキ型田下駄の出土例から判断して、この秋山氏の所見は正しいであろう。また瀬名遺跡出土の輪カンジキ型田下駄の出土例は、具体的にこの秋山氏の所見を補強する実例である⁽⁶⁾。足板状をした木製品は、上下端付近を有頭状または緊縛用の穿孔が施されており、この2つのタイプの足板に横木が組み合わされて出土したり、またより良好な出土としては、横木と輪を伴って出土している。つまり有頭状または緊縛用穿孔が上下端に設けられている足板状木製品は、輪カンジキ型田下駄になるということは明確に言えるであろう。

第50図の輪カンジキ型田下駄形態変遷に図示してある28点については、輪カンジキ型田下駄であると判断している。横木を伴って出土したものがうち10点あり、輪をも伴ったものが2点ある。これらの出土状況及び民具例の輪カンジキ型田下駄の形状から、これら28点はすべて輪カンジキ型田下駄になると考える。輪カンジキ型田下駄は既述の様に、足板と横木と輪とを植物繊維で緊縛するという構造をもつ。瀬名遺跡出土の輪カンジキ型田下駄の基本的な形態は、第40図の模式図で示した①～⑦がそれである。①は両端を有頭状に削りだし、緒孔を1つのみ有した足板をもつものである。③はやはり両端を有頭状に削りだし、緒孔を3つ有した足板をもつものである。④は平面形は舟形をし、上下端付近にそれぞれ緊縛用の穿孔を施し緒孔を有しない足板をもつものである。⑤は舟形をし、上下端付近に緊縛用の穿孔がそれぞれ1つずつあり、緒孔を3つ有する足板をもつものである。⑥は舟形をし、上下端付近に緊縛用の穿孔をそれぞれ2つずつ有し、緒孔を3つ有する足板をもつものである。足板の輪との緊縛部の形状の違いと、緒孔の数の違いが目立つ形態上の差異である。

第50図の形態変遷図であるが、1、2、5、12が①の形態の輪カンジキ型田下駄である。1、2は9区37層水田の畦畔内より横木を伴い、2枚セット1足分で出土したものである。5は横木と輪を伴って出土したものである。これらの足板には緒孔がなく、足を足板に縛り付けたものと想定する。6は②の形態として唯一確認できたもので、有頭、舟形の足板に緒孔が1つ穿たれたものである⁽⁷⁾。7、8、9、17、18、19、20、25は③の形態を示す。緊縛部を有頭にし、3つの緒孔が穿たれている。

3・4・10は④の形態で、緒孔がなく舟形の足板の上下端付近に緊縛用の穿孔が1つずつあるものである。横木の左右端部付近にも1つずつ穿孔がある。11、13、14、15は⑤の形態で舟形の足板に3つの穿孔が穿たれているものである。特に13は、横木、輪と伴に出土し、完形状態を復元できる好資料である⁽⁸⁾。16、21、22、26、27は⑥の形態で、舟形の足板に上下端付近に2つずつの緊縛用の穿孔がある。23、24、28は⑦の形態である。ただ23は輪を緊縛する上下端の孔が1つずつあるのに対し、24、28は2つずつある。これは民具例でも多く見られるが、長方形の板材を最も簡便に加工し、輪カンジキ型田下駄にしたものである。

①は古墳時代前期に確認でき、ほぼ古墳時代ぐらいで消えてしまうのだろうか。③のように明瞭に3

第50図 輪カンジギ型田下駄 編年図

弥生時代前期 古墳時代前期	1 2	3 4
古墳時代中期	5 6	7 8 9 10 11
古墳時代後期 奈良時代	12	13 14 15 16
平安時代	17 18 19 20	21 22 23 24
中・近世	25	26 27 28

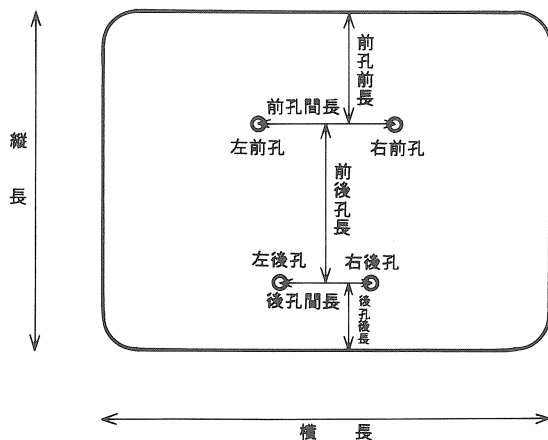
つの緒孔が穿たれたものは、古墳時代中期頃から現われると考えられ、その後民具例まで続くものである。④のように、①と同じく緒孔がないタイプのものは、古墳時代前期頃に現われ、古墳時代のうちに消えていくのだろう。⑤のように緒孔があるものは古墳時代中期に始まり、⑥のような上下端付近に2つの穿孔のあるものは、古墳時代後期頃から現われ、⑦のように平面形が長方形をしたものは、後出のものと考えることができる。

以上、瀬名遺跡における輪カンジキ型田下駄の形態変遷を検討したが、次の3点を確認しておきたい。1つは、輪カンジキ型田下駄が出現するのが弥生時代後期後半から古墳時代前期頃であり、定型化し数も増えるのが古墳時代中期である。先述のように、古墳時代中期には板状田下駄が急減し、消滅に向かう時期に当たる。つまり古墳時代前期から中期頃にかけて、田で足を浮かすために履く田下駄は板状の田下駄から輪カンジキ型田下駄に漸次置き換わっていくことが了解できる。板状田下駄はこの時期に消滅したようであるが、輪カンジキ型田下駄は、その後も中近世まで存続し、民具例までつながるようである。2つに、輪カンジキ型田下駄の足板において、古墳時代前期頃、初出の段階では緒孔しかないもので始まることである。古墳時代中期に3つの緒孔の形態が出現する。それはその後輪カンジキ型田下駄において普遍的な緒孔のあり方になる。これは日常履く下駄にも影響を与えたとも考えることができる。3つに、足板の上下端付近の緊縛用穿孔が1つずつから2つずつに変化していることや、足板の平面形が長方形のものが出現するということである。この変化は今の段階では明確にどの時期に現われるのか言えない。輪カンジキ型田下駄は板状田下駄に比して、出土数も少なく、帰属時期も幅があり変遷を明瞭に言い切れないという限界がある。

7 田下駄の形態と機能

田下駄、特に板状田下駄を計測し、計測値より田下駄の形態上の特徴を整理してみた。ここで特に取り上げるのは、緒孔の位置関係と表面積である。緒孔は板状の4孔の田下駄が対象となり、表面積は輪カンジキ型田下駄をも含めて検討した。ここで計測対象とした板状田下駄は、瀬名遺跡出土のもの95点、池ヶ谷遺跡（静岡市）出土のもの50点、川合遺跡（静岡市）出土のもの23点、長崎遺跡（清水市）出土のもの16点、計184点である。瀬名遺跡出土の田下駄は178点中、縦長、横長が計測でき、面積が概ね算出できるもの95点に絞った。また他3遺跡の田下駄は現地調査途中であることにより、担当の調査員が田下駄と現地点で認定しているものをすべて計測してみた。欠損状態によりこれら3遺跡の場合は計測不可の部位が多い。

計測部位の名称は第51図の模式図を参照してほしい。現行の民具例の緒孔の位置関係より4つの孔は、前孔より後孔の方が短いことより、4孔を逆台形状に配した場合を正位置とした。縦長、横長は各々の最大長を計測した。4孔の位置関係を示すため次の5つの部位を計測した。前孔間とは左前孔と右前孔間を測る。孔と孔の間長は孔の中心点から中心点を測った。後孔間とは左後孔と右後孔間の長さである。前孔前長とは前端から前孔間の直線に垂線を下ろした長さである。前後孔間長とは前孔間の直線から後孔間の直線までの長さである。後孔後長とは後端から後孔間の直線に垂線を下ろした長さである。以上の緒孔の位置関係を示す計測値に加えて、厚さ（平坦面の最大厚）、足台厚（足台のあるA類、B類の足台の最大厚）を計測した。面積はここでは横全長に縦全長を乗じた数値をあげた。



第51図 田下駄計測部位名

第37表 田下駄計測表

No	遺跡名	登録 番号	区	層位	年代観	分類	横全長 (cm)	縦全長 (cm)	足台 厚 (cm)	厚 (cm)	前孔 間 (cm)	前孔 前長 (cm)	後孔 間 (cm)	後孔 後長 (cm)	前後 孔間 (cm)	木取り	孔形	面 積 (cm ²)
1	瀬名遺跡	W1547	2.3	16	弥中	A-1	26.1	29.1	3.1	0.8	10.0	12.5	9.0	6.9	9.7	板目	円形	759.5
2	瀬名遺跡	W1548	2.3	16	弥中	A-1	23.7	28.1	3.2	1.2	8.8	12.1	8.0	5.8	9.9	板目	円形	666.0
3	瀬名遺跡	W1147	2.3	14	弥後～古前	A-1	20.5	23.3	3.5	1.8	9.8	4.6	－	－	－	追柁(木裏)	円形	477.7
4	瀬名遺跡	W1414	2.3	14	弥後～古前	A-1	23.8	23.6	2.3	2.1	8.9	8.8	8.1	3.9	10.8	板目(木裏)	円形	561.9
5	瀬名遺跡	W 738	1	22	弥後～古前	B-2	36.6	19.1	2.6	2.0	9.8	6.3	6.5	4.1	8.1	柁目	円形	699.1
6	瀬名遺跡	W1473	2.3	14	弥後～古前	B-2	31.5	15.4	－	2.0	18.8	3.4	8.8	8.8	3.1	柁目	円形	485.1
7	瀬名遺跡	W 408	2.3	12	弥後～古前	B-2	36.6	28.0	2.8	1.9	11.2	9.3	8.6	7.2	11.4	柁目	方形	1024.8
8	瀬名遺跡	W 412	2.3	12	弥後～古前	B-2	38.7	26.4	2.4	1.6	11.2	9.4	7.9	5.4	11.4	柁目	方形	1021.9
9	瀬名遺跡	W 429	2.3	12	弥後～古前	B-2	34.6	26.0	3.7	2.5	11.4	8.4	9.8	6.1	11.7	追柁	隅丸	899.6
10	瀬名遺跡	W2950	6	16	弥後～古前	B-2	38.3	24.1	3.4	2.3	10.8	7.7	8.8	3.0	12.7	追柁(木表)	方形	923.0
11	瀬名遺跡	W2951	6	16	弥後～古前	B-2	41.6	27.2	2.3	1.9	12.0	9.5	9.2	3.4	14.5	板目(木裏)	方形	1131.5
12	瀬名遺跡	W1155	6	16	弥後～古前	B-2	31.9	18.2	2.6	1.9	10.8	4.7	8.7	4.2	9.3	追柁(木裏)	円形	580.6
13	瀬名遺跡	W 597	6	16	弥後～古前	B-2	46.2	15.2	1.3	1.1	10.3	5.5	－	－	－	板目(木表)	円形	702.2
14	瀬名遺跡	W 504	8	17	弥後～古前	B-2	38.1	15.9	2.3	1.3	10.8	5.2	－	－	－	板目(木裏)	円形	605.8
15	瀬名遺跡	W2864	9	38	弥後～古前	B-2	38.4	28.9	2.9	2.0	12.8	9.5	8.5	7.8	11.4	板目(木裏)	方形	1109.8
16	瀬名遺跡	W 804	10	31	弥後～古前	B-2	33.0	23.4	－	2.3	10.5	7.6	8.7	6.5	9.1	板目(木裏)	方形	772.2
17	瀬名遺跡	W 537	9	25	平安	B-2	41.6	24.8	3.1	1.6	10.8	9.5	6.2	2.5	12.6	追柁	隅丸	1031.7
18	瀬名遺跡	W 737	1	22	弥後～古前	B-3	49.5	21.6	2.1	1.6	11.0	3.2	10.0	3.3	15.0	追柁(木表)	方形	1069.2
19	瀬名遺跡	W1541	2.3	16	弥中	B-3	31.6	17.2	3.3	1.0	11.7	3.3	10.7	3.0	10.8	板目	方形	543.5
20	瀬名遺跡	W 471	2.3	14	弥後～古前	B-3	31.8	16.1	1.9	1.4	11.4	2.2	11.7	1.9	11.3	板目(木裏)	隅丸	512.0
21	瀬名遺跡	W1009	2.3	12	弥後～古前	B-3	33.4	26.9	2.5	1.6	13.6	7.9	11.8	6.4	12.6	板目(木裏)	隅丸	898.5
22	瀬名遺跡	W 435	2.3	12	弥後～古前	B-3	42.4	16.2	1.9	1.5	9.7	3.0	7.6	3.2	10.0	板目(木表)	方形	686.9
23	瀬名遺跡	W 609	2.3	12	弥後～古前	B-3	49.1	21.0	2.8	1.5	－	－	9.5	2.6	－	板目(木表)	円形	1031.1
24	瀬名遺跡	W 334	5	13	弥後～古前	B-3	38.9	27.7	2.1	1.4	12.7	7.2	10.9	6.9	13.6	板目(木裏)	隅丸	1077.5
25	瀬名遺跡	SK7-10 001	7	10	弥後～古前	B-3	45.0	19.3	2.7	1.1	12.2	2.3	9.2	2.7	14.2	板目(木表)	円形	868.5
26	瀬名遺跡	W 912	7	10	弥後～古前	B-3	37.2	25.1	－	2.2	14.7	8.4	13.6	5.9	10.5	柁目	隅丸	933.7
27	瀬名遺跡	W 946	10	33	弥後～古前	B-3	36.2	17.7	3.1	1.6	10.9	4.8	8.4	2.8	10.0	追柁(木表)	方形	640.7
28	瀬名遺跡	W 189	1	22	弥後～古前	C-1	33.8	20.7	－	1.8	－	－	6.2	3.1	－	板目(木裏)	隅丸	699.7
29	瀬名遺跡	W 693	1	22	弥後～古前	C-1	37.6	15.4	－	2.0	9.8	3.4	8.2	3.0	8.7	追柁(木裏)	方形	579.0
30	瀬名遺跡	W1743	1	22	弥後～古前	C-1	49.5	22.6	2.0	1.9	9.3	8.8	8.3	4.4	9.2	柁目	方形	1118.7
31	瀬名遺跡	W1722	1	22	弥後～古前	C-1	41.1	25.1	－	1.7	10.3	12.2	8.1	4.2	9.3	追柁(木表)	方形	1031.6
32	瀬名遺跡	W1595	2.3	20	弥中	C-1	24.4	13.3	－	1.8	10.5	3.9	－	－	－	板目(木表)	方形	324.5
33	瀬名遺跡	W1552	2.3	16	弥中	C-1	25.3	22.8	－	3.3	8.8	6.0	9.0	5.7	10.2	板目(木表)	方形	576.8
34	瀬名遺跡	W 403	2.3	12	弥後～古前	C-1	36.3	17.1	－	1.4	11.4	3.1	7.3	3.0	10.8	板目(木表)	方形	620.7
35	瀬名遺跡	W 582	2.3	12	弥後～古前	C-1	40.3	13.3	－	2.4	10.3	2.7	7.3	1.3	8.7	板目(木表)	隅丸	536.0
36	瀬名遺跡	W 411	2.3	12	弥後～古前	C-1	40.4	14.9	－	1.0	－	－	8.6	4.6	－	板目	円形	602.0
37	瀬名遺跡	W 449	2.3	12	弥後～古前	C-1	37.2	16.8	－	1.9	8.8	4.4	6.6	2.1	10.2	板目(木表)	方形	624.5
38	瀬名遺跡	W 554	2.3	12	弥後～古前	C-1	34.5	19.7	－	1.9	9.3	5.3	6.9	3.1	11.2	板目(木表)	円形	679.6
39	瀬名遺跡	W 438	2.3	12	弥後～古前	C-1	41.6	24.9	－	1.9	8.8	4.4	6.6	2.1	10.2	追柁(木表)	方形	1035.8
40	瀬名遺跡	W 436	2.3	12	弥後～古前	C-1	49.9	19.2	－	2.1	10.8	5.3	10.0	4.5	9.6	板目(木表)	方形	658.1
41	瀬名遺跡	W 406	2.3	12	弥後～古前	C-1	34.8	28.8	－	1.8	11.0	9.9	8.4	6.7	13.3	板目(木裏)	隅丸	1002.2
42	瀬名遺跡	W 154	2.3	12	弥後	C-1	40.5	22.5	－	2.1	10.7	7.0	－	－	－	板目(木裏)	隅丸	911.3
43	瀬名遺跡	W 720	2.3	12	弥後～古前	C-1	37.8	21.3	－	2.7	10.6	7.8	8.9	3.3	10.2	板目(木表)	隅丸	805.1
44	瀬名遺跡	W 633	2.3	12	弥後～古前	C-1	35.6	21.8	－	1.3	11.6	5.9	7.9	3.3	12.5	板目(木裏)	方形	776.1
45	瀬名遺跡	W 625	2.3	12	弥後～古前	C-1	35.4	17.0	－	1.7	8.2	6.2	6.1	2.2	8.0	板目(木裏)	方形	601.8
46	瀬名遺跡	W 418	2.3	12	弥後～古前	C-1	38.8	18.5	－	1.4	9.2	7.1	7.6	1.7	9.3	板目(木表)	隅丸	717.8
47	瀬名遺跡	W 417	2.3	12	弥後～古前	C-1	33.3	22.1	－	2.1	7.6	8.0	7.0	4.1	9.9	板目(木裏)	隅丸	735.9
48	瀬名遺跡	W 413	2.3	12	弥後～古前	C-1	43.8	27.8	－	1.2	11.1	11.2	5.6	4.9	12.2	板目(木裏)	隅丸	217.6

No	遺跡名	登録 番号	区	層位	年代観	分類	横全長 (cm)	縦全長 (cm)	足台 厚 (cm)	厚 (cm)	前孔 間 (cm)	前孔 前長 (cm)	後孔 間 (cm)	後孔 後長 (cm)	前後 孔間 (cm)	木取り	孔形	面 積 (cm ²)
49	瀬名遺跡	W 430	2.3	12	弥後～古前	C-1	42.9	16.9	－	1.6	8.0	6.3	6.3	1.4	8.9	追柵(木表)	円形	725.0
50	瀬名遺跡	W 393	2.3	11	古墳	C-1	31.3	33.4	－	2.0	12.5	12.8	8.1	5.7	15.3	柵目	隅丸	1045.4
51	瀬名遺跡	W 216	5	10	弥後～古前	C-1	28.0	12.5	－	1.6	6.8	2.9	6.6	2.8	5.8	追柵(木裏)	隅丸	350.0
52	瀬名遺跡	W 221	5	10	弥後～古前	C-1	32.7	12.5	－	1.8	9.3	5.8	－	－	－	板目(木裏)	方形	408.8
53	瀬名遺跡	W 228	5	10	弥後～古前	C-1	36.8	19.4	－	1.8	8.6	5.4	8.4	4.7	9.4	板目(木裏)	－	713.9
54	瀬名遺跡	W 229	5	10	弥後～古前	C-1	35.4	12.8	－	1.6	－	－	9.8	5.6	－	板目(木表)	隅丸	453.1
55	瀬名遺跡	W 230	5	10	弥後～古前	C-1	39.8	23.2	－	2.3	10.2	8.0	7.0	5.1	10.0	板目(木表)	方形	923.4
56	瀬名遺跡	W 232	5	10	弥後～古前	C-1	32.7	16.2	－	1.3	9.8	4.1	8.0	2.8	9.4	柵目	円形	529.7
57	瀬名遺跡	W1190	6	16	弥後～古前	C-1	34.5	15.8	－	1.1	6.0	5.8	4.8	1.7	8.8	板目(木裏)	方形	545.1
58	瀬名遺跡	W2797	6	16	弥後～古前	C-1	41.8	16.1	－	1.7	9.3	4.1	7.4	2.7	9.3	板目(木表)	隅丸	673.0
59	瀬名遺跡	W2456	6	16	弥後～古前	C-1	31.6	18.3	－	1.3	9.9	5.5	8.2	2.5	10.0	追柵(木裏)	方形	578.3
60	瀬名遺跡	W 883	7	10	弥後～古前	C-1	37.1	31.5	－	1.4	11.3	12.7	7.8	6.8	12.1	追柵(木裏)	隅丸	1168.6
61	瀬名遺跡	SK7-10 461	7	10	弥後～古前	C-1	39.1	16.7	－	1.2	10.6	3.3	8.3	1.6	11.4	板目(木裏)	隅丸	653.0
62	瀬名遺跡	W 906	7	10	弥後～古前	C-1	36.8	18.2	－	1.4	8.6	8.3	6.6	2.0	7.6	追柵(木表)	円形	670.0
63	瀬名遺跡	W 907	7	10	弥後～古前	C-1	38.3	19.1	－	1.7	8.5	8.0	6.1	2.6	8.3	追柵(木裏)	隅丸	731.5
64	瀬名遺跡	W 903	7	10	弥後～古前	C-1	40.0	23.5	－	1.9	9.8	6.1	8.9	6.1	10.7	板目(木表)	円形	940.0
65	瀬名遺跡	W 670	8	17b	弥後～古前	C-1	36.8	19.0	－	2.3	12.0	4.3	11.5	3.3	11.1	板目(木表)	円形	699.2
66	瀬名遺跡	W 682	8	17b	弥後～古前	C-1	33.6	8.2	－	1.5	－	－	－	－	－	追柵(木裏)	隅丸	275.5
67	瀬名遺跡	W1671	9	38	弥後～古前	C-1	32.0	16.1	－	1.6	9.2	3.9	8.4	2.7	19.8	板目(木表)	隅丸	515.2
68	瀬名遺跡	W1765	9	38	弥後～古前	C-1	35.7	15.5	－	1.9	10.3	2.7	5.7	4.2	8.1	板目(木表)	方形	553.4
69	瀬名遺跡	W1894	9	38	弥後～古前	C-1	34.5	20.0	－	1.4	9.6	5.1	7.6	2.9	11.8	板目(木表)	隅丸	690.0
70	瀬名遺跡	W1773	9	38	弥後～古前	C-1	37.3	22.6	－	2.0	9.6	6.8	8.0	4.8	11.0	板目(木表)	方形	843.0
71	瀬名遺跡	W1774	9	38	弥後～古前	C-1	29.8	11.7	－	1.6	－	－	6.3	1.7	－	柵目	隅丸	348.7
72	瀬名遺跡	W1811	9	38	弥後～古前	C-1	40.0	16.8	－	1.2	10.2	4.6	7.5	1.3	10.8	追柵(木表)	方形	672.0
73	瀬名遺跡	W1661	9	37	弥後～古前	C-1	40.1	35.5	－	1.4	11.6	13.5	12.1	10.0	11.5	柵目	方形	1423.6
74	瀬名遺跡	W1663	9	37	弥後～古前	C-1	38.5	35.4	－	1.6	10.4	11.3	10.3	11.9	11.8	柵目	方形	1362.9
75	瀬名遺跡	W1626	9	37	弥後～古前	C-1	38.1	19.9	－	2.2	11.0	7.1	7.8	2.2	10.5	板目(木表)	方形	758.2
76	瀬名遺跡	W1625	9	37	弥後～古前	C-1	39.6	19.4	－	2.3	10.8	5.6	7.6	2.1	11.7	板目(木表)	方形	768.2
77	瀬名遺跡	W1627	9	37	弥後～古前	C-1	33.7	20.4	－	2.3	11.4	6.5	7.8	2.1	11.7	板目(木表)	方形	687.5
78	瀬名遺跡	W1647	9	33	古墳～奈良	C-1	40.8	21.5	－	1.6	10.9	7.1	7.9	2.5	11.9	追柵(木表)	方形	877.2
79	瀬名遺跡	W 835	10	35	弥後～古前	C-1	39.7	15.5	－	1.7	－	－	7.6	4.1	－	柵目	隅丸	615.4
80	瀬名遺跡	W2811	10	33	弥後～古前	C-1	32.4	17.1	－	1.4	9.4	5.4	7.4	3.2	8.6	板目(木表)	隅丸	554.0
81	瀬名遺跡	W 838	10	31	弥後～古前	C-1	52.6	20.8	－	2.2	9.5	6.5	7.3	3.2	11.2	柵目	方形	1094.1
82	瀬名遺跡	W 694	1	22	弥後～古前	C-2	46.0	19.9	－	1.9	9.4	4.2	7.3	2.5	13.1	板目(木表)	隅丸	915.4
83	瀬名遺跡	W 433	2.3	12	弥後～古前	C-2	42.0	13.2	－	1.8	9.7	3.7	－	－	－	板目(木表)	－	554.4
84	瀬名遺跡	W1419	6	16	弥後～古前	C-2	40.8	15.9	－	1.3	11.5	4.2	9.6	3.4	7.8	板目(木表)	隅丸	648.7
85	瀬名遺跡	W1964	9	38	弥後～古前	C-2	36.4	19.2	－	1.1	9.0	6.5	8.0	5.4	6.9	板目(木表)	方形	698.9
86	瀬名遺跡	W1666	9	38	弥後～古前	C-2	40.7	24.2	－	1.8	11.8	9.2	10.0	5.7	9.3	板 (木表)	方形	984.9
87	瀬名遺跡	W1097	10	33	弥後～古前	C-2	42.4	16.0	－	1.1	9.6	7.7	－	－	－	板目(木表)	円形	678.4
88	瀬名遺跡	W 394	2.3	11	古墳	C-3	37.4	20.5	－	2.1	10.4	4.4	7.4	2.2	13.3	板目(木表)	方形	766.7
89	瀬名遺跡	W 207	5	10	弥後～古前	C-3	36.4	24.1	－	1.5	10.4	7.0	8.3	6.4	10.7	板目(木表)	方形	877.2
90	瀬名遺跡	W1624	9	37	弥後～古前	C-3	40.3	18.3	－	1.8	11.4	6.2	7.5	1.9	10.3	板目(木表)	方形	737.5
91	瀬名遺跡	W2003	9	40	弥中	C-3	36.8	22.2	－	1.1	9.8	6.7	7.3	3.5	11.6	板目(木表)	方形	817.0
92	瀬名遺跡	W 783	10	31	弥後～古前	C-3	29.5	13.8	－	1.8	6.3	3.7	5.2	3.1	6.4	板目(木表)	隅丸	407.1
93	瀬名遺跡	W 522	8	17a	弥後～古前	D	35.4	10.6	－	1.3	－	－	－	－	－	板 (木表)	－	375.2
94	瀬名遺跡	W 805	10	31	弥後～古前	D	30.3	14.7	－	2.2	－	－	－	－	－	追柵(木裏)	－	445.4
95	瀬名遺跡	W2729	6	16	弥後～古前	D	35.7	14.5	－	1.8	－	－	－	－	－	板目(木表)	円形	517.7
96	池ヶ谷遺跡	W 324	4	4	平安	3孔	(51.1)	(21.3)	－	3.0	－	－	－	－	－	板目	円形	

No	遺跡名	登録 番号	区	層位	年代観	分類	横全長 (cm)	縦全長 (cm)	足台 厚 (cm)	厚 (cm)	前孔 間 (cm)	前孔 前長 (cm)	後孔 間 (cm)	後孔 後長 (cm)	前後 孔間 (cm)	木取り	孔形	面 積 (cm ²)
97	池ヶ谷遺跡	W1680	6	4	平安	3孔	39.2	18.2	－	2.0	－	－	－	－	－	板目	方形	713.4
98	池ヶ谷遺跡	W 487		4	平安	3孔	36.5	17.0	－	2.0	－	－	－	－	－	板目	方形	620.5
99	池ヶ谷遺跡	W 30	7	4	平安	3孔	(37.7)	(14.3)	－	1.6	－	－	－	－	－	?	円形	
100	池ヶ谷遺跡	W5010	7	6	弥後～古前	C-3	57.4	21.2	－	1.7	9.0	7.8	7.5	2.0	11.8	板目	方形	1216.9
101	池ヶ谷遺跡	W7093	7	6	弥後～古前	C-2	63.3	22.2	－	2.4	10.0	7.5	9.0	2.3	12.5	板目	方形	1405.3
102	池ヶ谷遺跡	W5014	7	6	弥後～古前	C-1	56.8	23.3	－	1.8	10.5	8.5	7.5	1.8	13.3	板目	隅丸	1323.4
103	池ヶ谷遺跡	W8214	7	6	弥後～古前	C-3	59.1	19.0	－	1.8	11.0	6.8	7.8	0.8	10.5	板目	隅丸	1122.9
104	池ヶ谷遺跡	W7706	7	6	弥後～古前	C-2	(43.4)	20.0	－	1.8	10.5	6.0	8.0	2.5	11.5	板目	方形	
105	池ヶ谷遺跡	W7921	7	6	弥後～古前	C-3	57.1	19.5	－	1.8	10.5	5.3	8.0	2.5	12.0	板目	方形	1113.5
106	池ヶ谷遺跡	W7778	7	6	弥後～古前	C-1	40.4	23.3	－	2.6	10.5	10.3	8.0	2.3	11.0	板目	方形	941.3
107	池ヶ谷遺跡	W7779	7	6	弥後～古前	C-1	43.8	21.6	－	2.5	10.5	7.8	7.8	2.3	11.8	板目	方形	946.1
108	池ヶ谷遺跡	W9529	7	6	弥後～古前	C-1	40.6	26.9	－	1.7	10.3	9.8	7.5	3.8	13.5	板目	隅丸	1092.1
109	池ヶ谷遺跡	W7609	7	6	弥後～古前	C-1	(40.4)	14.1	－	1.4	9.8	2.8	6.5	1.5	9.8	板目	方形	
110	池ヶ谷遺跡	W 328	1・2	6	弥後～古前	C-1	36.2	22.1	－	1.9	8.8	5.8	9.5	7.0	9.5	追粧	隅丸	800.0
111	池ヶ谷遺跡	W7564	7	6	弥後～古前	C-1	43.9	19.5	－	2.4	10.0	4.8	10.0	4.8	10.0	板目	隅丸	856.1
112	池ヶ谷遺跡	W5013	7	6	弥後～古前	C-1	41.1	16.7	－	1.7	9.3	4.8	7.3	2.5	9.5	板目	円形	686.4
113	池ヶ谷遺跡	W9546	7	6	弥後～古前	C-1	33.3	16.3	－		7.5	5.5	6.5	3.8	7.0	板目	方形	542.8
114	池ヶ谷遺跡	W7196	7	6	弥後～古前	C-1	38.9	16.4	－	1.7	7.5	4.5	6.3	1.8	9.8	板目	隅丸	638.0
115	池ヶ谷遺跡	W7146	7	6	弥後～古前	C-1	37.6	16.8	－	2.1	6.5	3.0	6.5	2.8	11.5	板目	隅丸	631.7
116	池ヶ谷遺跡	W7153	7	6	弥後～古前	A?	19.6	21.8	－	3.1	9.3	6.0	7.8	3.8	12.5	粧目	方形	427.3
117	池ヶ谷遺跡	W8852	7	6	弥後～古前	C-1	43.7	21.1	－	2.3	10.5	6.8	7.3	2.5	11.5	板目	方形	922.1
118	池ヶ谷遺跡	W 890	1・2	6	弥後～古前	C-1	45.6	20.9	－	2.4	9.3	3.3	11.3	6.3	10.8	板目	方形	953.0
119	池ヶ谷遺跡	W 598	1・2	6	弥後～古前	C-1	47.9	20.0	－	1.9	11.5	5.0	8.5	4.5	10.5	板目	隅丸	958.0
120	池ヶ谷遺跡	W5018	7	6	弥後～古前	C-1	51.1	20.7	－	2.0	10.5	4.8	8.0	3.3	12.8	板目	隅丸	1057.8
121	池ヶ谷遺跡	W5009	7	6	弥後～古前	C-1	52.6	19.8	－	1.6	9.3	1.0	6.5	3.3	11.5	粧目	隅丸	1041.5
122	池ヶ谷遺跡	W7923	7	6	弥後～古前	C-1	52.3	20.0	－	1.8	11.3	4.3	8.0	3.5	12.3	板目	方形	1046.0
123	池ヶ谷遺跡	W7022	7	6	弥後～古前	C-1	109.5	20.3	－	1.9	12.3	3.5	12.8	3.5	13.3	板目	方形	2222.9
124	池ヶ谷遺跡	W9151	7	6	弥後～古前	C-1	68.0	21.9	－	2.3	11.8	4.3	8.8	3.3	14.5	板目	隅丸	1489.2
125	池ヶ谷遺跡	W7189	7	6	弥後～古前	C-1	68.5	19.9	－	2.0	9.8	4.5	7.3	4.5	10.8	板目	隅丸	1363.2
126	池ヶ谷遺跡	W5019	7	6	弥後～古前	C-1	51.6	19.3	－	2.0	10.5	4.8	8.0	3.0	11.8	粧目	円形	995.9
127	池ヶ谷遺跡	W8371	7	6	弥後～古前	C-1	61.9	21.5	－	1.7	10.0	7.8	8.0	3.0	10.8	板目	隅丸	1330.9
128	池ヶ谷遺跡	W7718	7	6	弥後～古前	C-1	57.3	20.1	－	1.7	8.5	6.8	7.3	2.8	10.5	板目	円形	1151.7
129	池ヶ谷遺跡	W7802	7	6	弥後～古前	C-1	52.8	22.4	－	1.4	10.3	8.3	8.3	2.8	11.5	板目	方形	1182.7
130	池ヶ谷遺跡	W8570	7	6	弥後～古前	D	44.3	17.1	－	2.4	－	－	－	－	－	板目	－	757.5
131	池ヶ谷遺跡	W 335	1・2	6	弥後～古前	?	(43.3)	(18.4)	－	2.7	－	－	－	－	－	粧目	方形	
132	池ヶ谷遺跡	W7850	7	6	弥後～古前	?	(46.9)	(15.6)	－	1.5	－	－	－	－	－	粧目	隅丸	
133	池ヶ谷遺跡	W5022	7	6	弥後～古前	?	(41.3)	(12.1)	－	1.4	－	－	－	－	－	板目	隅丸	
134	池ヶ谷遺跡	W 333	2	6	弥後～古前	?	(41.8)	(13.4)	－	1.4	－	－	－	－	－	追粧	隅丸	
135	池ヶ谷遺跡	W 426	1・2	6	弥後～古前	?	(52.5)	(11.6)	－	1.6	－	－	－	－	－	粧目	円形	
136	池ヶ谷遺跡	W5017	7	6	弥後～古前	?	(54.2)	(11.5)	－	1.8	－	－	－	－	－	板目	円形	
137	池ヶ谷遺跡	W 611	1	6	弥後～古前	D	36.5	12.1	－	3.0	－	－	－	－	－	板目	－	441.7
138	池ヶ谷遺跡	W5006	7	6	弥後～古前	B-2	67.7	34.5	2.8	1.7	11.5	10.5	8.0	9.3	15.3	板目	隅丸	2335.7
139	池ヶ谷遺跡	W5015	7	6	弥後～古前	B-3	(47.2)	25.0	2.8	1.8	11.0	6.0	8.8	4.5	13.8	粧目	円形	
140	池ヶ谷遺跡	W5001	7	6	弥後～古前	B-3	44.7	19.6	4.0	1.7	9.0	3.8	8.0	2.3	13.5	板目	方形	876.1
141	池ヶ谷遺跡	W5011	7	6	弥後～古前	B-1	56.8	26.0	2.5	1.5	16.0	(8.5)	14.0	2.8	14.0	板目	円形	1476.8
142	池ヶ谷遺跡	W8472	7	6	弥後～古前	B-2	50.0	(22.3)	2.3	1.6	9.5	6.8	－	－	(13.5)	粧目	円形	
143	池ヶ谷遺跡	W9551	7	6	弥後～古前	B-2	(37.6)	20.6	2.3	1.7	9.3	3.5	9.0	5.0	12.0	板目	隅丸	
144	池ヶ谷遺跡	W8930	7	6	弥後～古前	B-3	43.2	26.9	4.8	1.2	10.0	9.8	9.0	4.8	12.5	板目	隅丸	1162.1
145	池ヶ谷遺跡	W9412	7	6	弥後～古前	B-3	(47.9)	(8.9)	2.5	1.2	－	－	－	－	－	板目	隅丸	

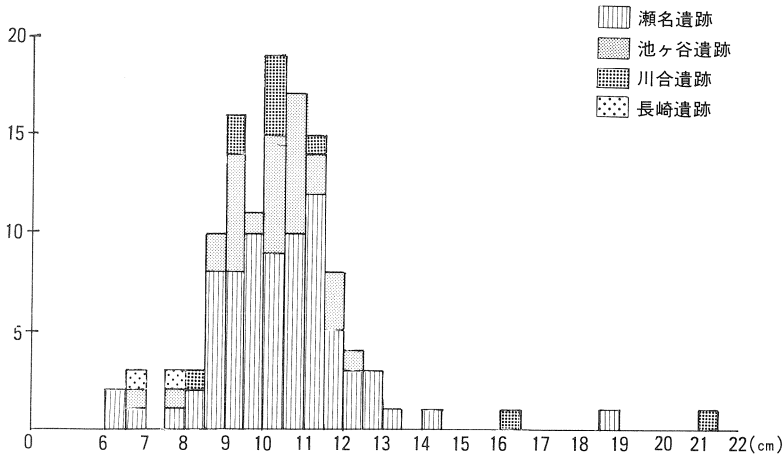
No	遺跡名	登録 番号	区	層位	年代観	分類	横全長 (cm)	縦全長 (cm)	足台 厚 (cm)	厚 (cm)	前孔 間 (cm)	前孔 前長 (cm)	後孔 間 (cm)	後孔 後長 (cm)	前後 孔間 (cm)	木取り	孔形	面 積 (cm ²)
146	川合遺跡	W 768	11			C-2	(44.2)	(22.6)	－	3.0	10.8	7.8	8.0	(2.7)	12.9	板目	円形	
147	川合遺跡	W 145	8		弥中～古前	C-1	31.2	18.3	－	2.0	9.3	5.0	7.8	3.8	9.5	板目	隅丸	571.0
148	川合遺跡	W 142	8		弥後～古前	C-1	30.6	17.2	－	1.8	10.3	4.5	7.3	3.0	9.0	板目	隅丸	526.3
149	川合遺跡	W 144	8		弥中～古前	C-1	(32.2)	(17.5)	－	1.8	8.8	(4.0)	6.5	3.0	9.0	板目	隅丸	
150	川合遺跡	W 788	11		弥中～古前	?	(24.5)	14.8	－	2.0	－	－	－	－	(8.0)	板目	方形	
151	川合遺跡	W 173	8		弥中～古前	?	(36.0)	(15.5)	3.3	1.5	－	－	－	－	－	板目	－	
152	川合遺跡	W 747	11		弥中～古前	C-1	(42.8)	(25.7)	－	2.8	8.5	(12.0)	7.0	2.8	10.0	板目	隅丸	
153	川合遺跡	W 741	11		弥中～古前	C-2	35.7	19.9	－	1.8	8.0	5.0	7.3	3.5	11.0	板目	隅丸	710.4
154	川合遺跡	W 765	11		弥中～古前	C-1	42.0	24.9	－	2.8	10.0	9.5	8.8	2.8	11.8	板目	隅丸	1045.8
155	川合遺跡	W 690	11		弥中～古前	C-1	56.3	23.3	－	2.4	11.0	5.8	8.8	4.3	12.8	板目	方形	1311.8
156	川合遺跡	W 143	8		弥中～古前	C-1	34.5	22.0	－	2.7	10.0	9.3	7.8	2.8	10.8	板目	方形	759.0
157	川合遺跡	W 274	12		弥中～古前	C-1	48.0	19.7	－	2.5	10.0	5.3	7.0	3.0	10.8	板目	隅丸	945.6
158	川合遺跡	W 408	12		弥中～古前	?	49.6	(12.9)	－	1.4	－	－	－	－	－	板目	方形	
159	川合遺跡	W 632	12		弥中～古前	?	46.5	(15.1)	－	1.9	－	－	－	－	－	板目	隅丸	
160	川合遺跡	W 334	12		弥中～古前	?	(43.6)	(12.9)	－	1.5	－	－	－	－	－	板目	隅丸	
161	川合遺跡	W 335	12		弥中～古前	C-1	37.0	16.4	－	2.0	9.0	4.3	7.0	4.0	7.5	板目	方形	606.8
162	川合遺跡	W 481			弥中～古前	?	(39.0)	(8.8)	－	2.2	－	－	－	－	－	板目	方形	
163	川合遺跡	W 527	12		弥中～古前	?	44.0	(9.6)	－	1.6	－	－	－	－	－	板目	円形	
164	川合遺跡	W 591	12		弥中～古前	?	(44.9)	(6.1)	－	1.6	－	－	－	－	－	板目	方形	
165	川合遺跡	W 254	13		弥中～古前	?	(43.5)	(9.3)	－	1.8	－	－	－	－	－	板目	方形	
166	川合遺跡	W 595	12		弥中～古前	B-3	(46.4)	(10.5)	1.3	1.2	－	－	－	－	－	板目	方形	
167	川合遺跡	W 690	12	5	弥後～古前	B-3	36.3	22.1	6.4	2.5	16.0	12.0	14.3	6.5	24.5	板目	方形	802.2
168	川合遺跡	W 409	12		弥後～古前	B-3	48.8	21.3	4.3	3.2	21.0	13.5	15.0	6.5	22.5	板目	隅丸	1039.4
169	長崎遺跡	W 86	4		弥中～古前	?	(18.6)	(24.9)	－	(2.1)	－	－	－	－	－	板目	円形	
170	長崎遺跡	W 871	5		弥中～古前	C-2	()	()	－	(1.8)	9.5	7.5	7.6	－	9.6	板目	円形	
171	長崎遺跡	W1048	5		弥中～古前	?	()	()	－	1.5	－	－	－	－	－	板目	隅丸	
172	長崎遺跡	W 814	5		弥中～古前	C-1	()	()	－	1.8	－	2.2	－	－	8.0	板目	円形	
173	長崎遺跡	W 19	1	2	弥後～古前	C-1	38.5	28.0	－	1.6	6.8	4.9	8.2	6.4	8.4	板目	方形	1078.0
174	長崎遺跡	W 300	1	2	弥後～古前	C-1	(27.8)	(19.0)	－	2.4	7.4	3.4	9.3	3.6	11.8	板目	円形	
175	長崎遺跡	W1035	1		弥中	－	(20.6)	(6.8)	－	1.4	－	－	－	－	－	板目		
176	長崎遺跡	W 25	1		弥中	C-1	(24.2)	(14.9)	－	2.2	－	－	9.9	4.0	－	板目	円形	
177	長崎遺跡	W1161	1		弥後～古前	?	(27.1)	(11.6)	－	2.7	－	－	－	－	－	板目		
178	長崎遺跡	W 44	3		弥中	?	(25.3)	(15.5)	－	2.6	－	－	8.0	5.8	－	板目	方形	
179	長崎遺跡	W 815	5		弥中～古前	C-1	35.0	20.2	－	1.7	7.8	6.4	6.0	2.1	7.7	板目	隅丸	707.0
180	長崎遺跡	W1012	5		弥中～古前	C-1	(30.6)	(17.9)	－	(2.8)	9.7	7.0	－	－	－	板目	方形	
181	長崎遺跡	W 803	1		弥後～古前	?	(21.1)	(9.3)	－	1.5	－	－	－	－	－	板目	隅丸	
182	長崎遺跡	W 15	4		弥後～古前	?	(44.4)	(13.1)	－	1.1	－	－	－	－	－	板目	方形	
183	長崎遺跡	W 705	6		弥後前半		12.0	(24.1)	－	1.0	－	－	－	－	－	板目	方形	
184	長崎遺跡	W 370	6		弥後～古前		(28.9)	(9.6)	－	2.1	－	－	－	－	－	板目	隅丸	

それに木取り（瀬名遺跡出土のものは木表、木裏が判別できるものは表記した。）そして緒孔の平面形を示した。

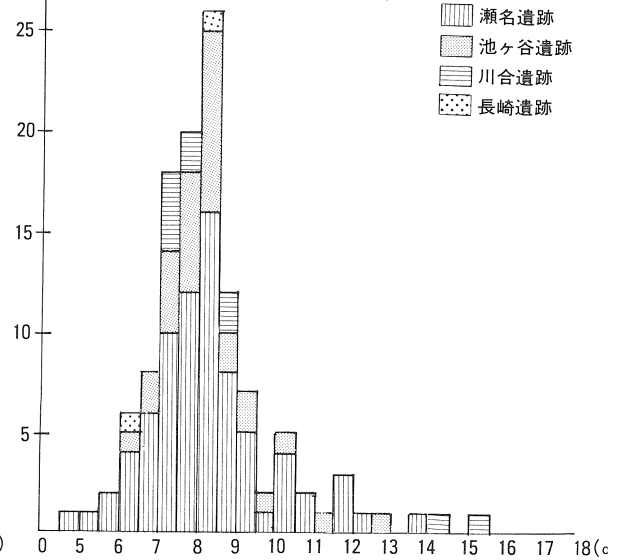
次に4つの緒孔の位置関係を見る。その場合、4つの緒孔が明瞭に残存した資料でないと、正確にその位置関係を示せない故、1つでも緒孔の位置が不明の田下駄は外した。瀬名遺跡77点、池ヶ谷遺跡30点、川合遺跡10点、長崎遺跡2点の計119点を対象資料とした。

第38表は前孔間の度数分布表である。8.5cm～12cmの間に、全体の81%が入ってくる。この当たりが前

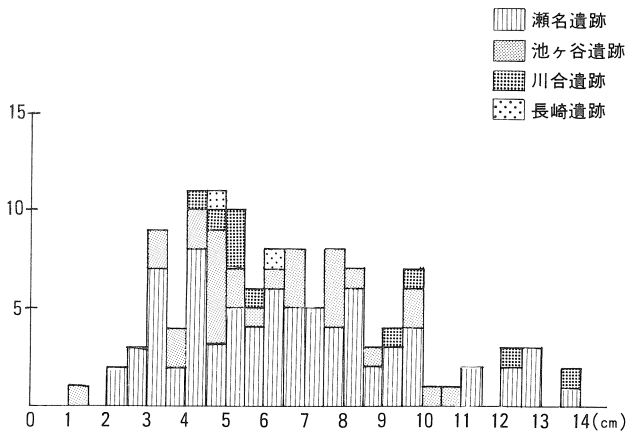
第38表 前孔間度数分布表



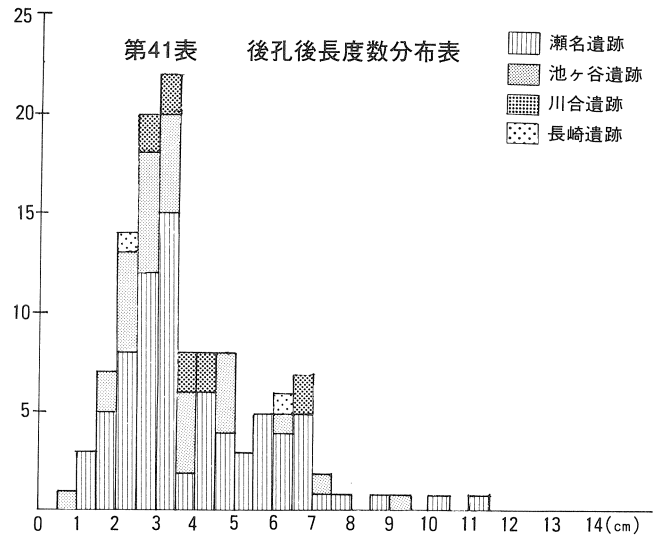
第39表 後孔間度数分布表



第40表 前孔前長度数分布表



第41表 後孔後長度数分布表



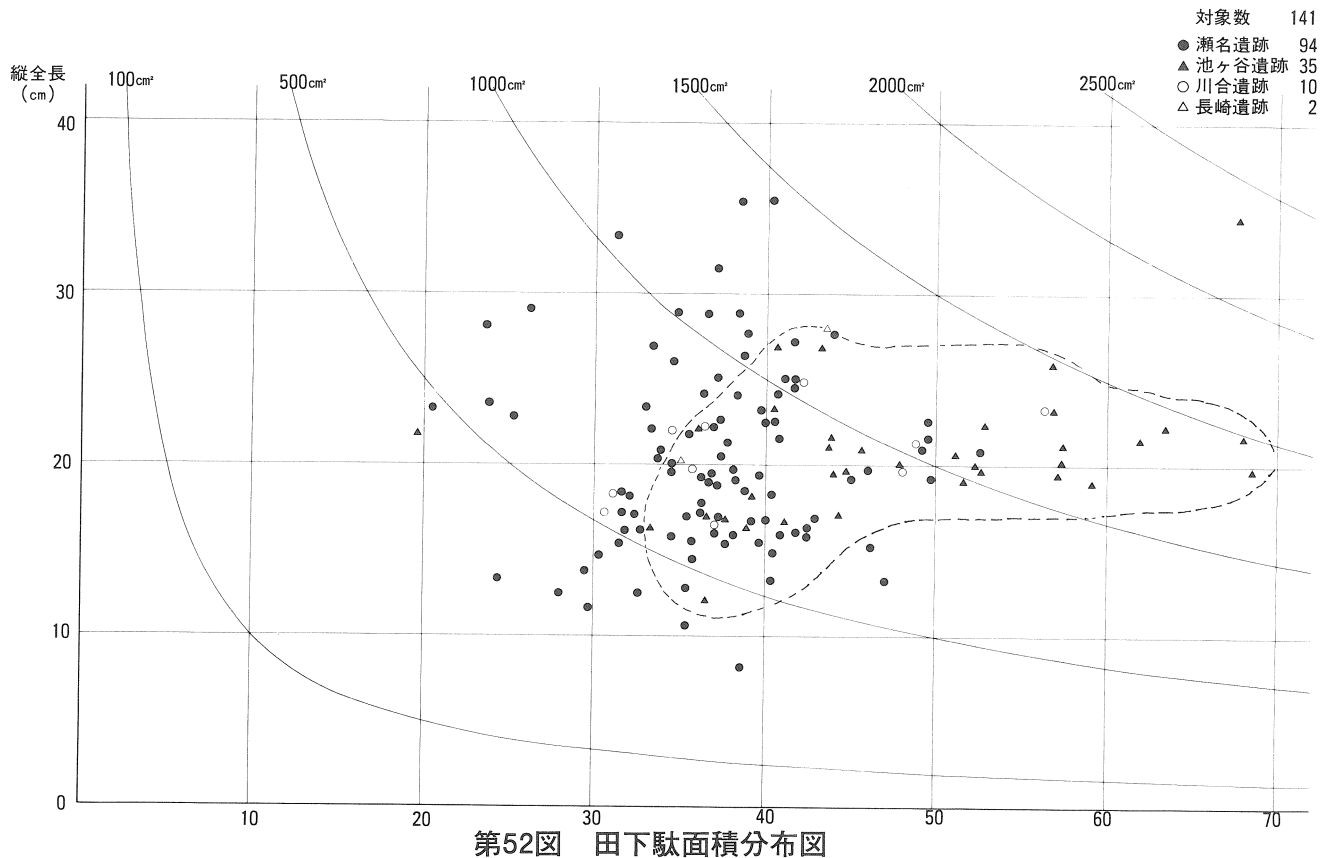
孔間の適当な間隔と考えられる。第39表は後孔間の度数分布表である。7 cm～9 cmの間に全体の64%が入って来ておりバラツキが少ないのが了解できる。第38表と第39表より、前孔間より後孔間の方が相対的に短いことが了解でき、以前より感覚的に前孔間の方が後孔間より幅広であることが数値によって示すことができる。これは当然現行の民具資料からも言える傾向であり、足を緊縛する際、足の指付近の方が踵付近より幅広になることから容易に想像することができる。

第41表は後孔後長の度数分布表である。3 cm前後にピークがくる残存状態が良好の田下駄は、この数値に来るようだ。8 cm～11 cm前後もあるものは、田下駄の前後が判別するのに若干苦しんだような曖昧な資料である。後孔後長は3 cmほど短いということが指摘できる。第40表は前孔前長の度数分布表である。後孔後長に比して度数がバラツキ、ピークが明瞭でなく集中しない。3 cm～10 cm間に85%のものが入る。前孔前長は集中する数値はないものの、後孔後長に比して明かに長いのが特徴である。

前後孔間はここでは分布表を作成しなかったが、10 cm前後とやはり足を固定するには相応しい程度の距離がある。以上の検討より、板状田下駄の緒孔位置は明確な位置関係があることを示すことができる。つまり前後間長は8.5 cm～12 cmほどで、後孔間が7 cm～8.5 cmと短いのに比して長く、前後孔長間は10 cm

前後離れてあり、後孔後長は3 cm前後と短く、前孔前長は後孔後長に比して長く3 cm～10 cmの幅にくる。この位置関係で示された4孔は緒孔として板状田下駄をバランスよく緊縛できるためのものであると言えるであろう。

次に、田下駄の面積について検討する。前述のように縦全長、横全長を計測できた田下駄141点(10)を対象資料として第52図に表面積の分布図を作成した。この図は縦軸に縦全長をとり、横軸に横全長をとったものである。500cm²～1500cm²に90%が含まれる。全資料の面積平均値が813.8cm²なのに対し、瀬名遺跡出土のものの平均値が735.2cm²であり、池ヶ谷遺跡は1017.7cm²である。この分布図内に破線で囲んだ範囲内に池ヶ谷遺跡出土の田下駄の大半が入ってしまうのがわかる。池ヶ谷遺跡出土の田下駄は瀬名遺跡出土のそれに比して面積が大きい傾向があるという事実に加え、この分布図より、横全長の長いものが多いことが了解できる。瀬名遺跡出土の田下駄の横全長の平均値が35.9cmであるのに比して池ヶ谷遺跡のそれは48.3cmと12.4cmの差がある。縦全長の平均値は瀬名遺跡が20.2cm、池ヶ谷遺跡が21.3cmとあまり差がないのとは対象的である。つまり瀬名遺跡の板状田下駄と池ヶ谷遺跡のそれとは、縦の長さは変わらないが、横の長さが池ヶ谷遺跡の方が相当長く、その分平面積が池ヶ谷遺跡の田下駄が大きいということがわかる。



ここで池ヶ谷遺跡と瀬名遺跡の立地条件を瞥見してみる。池ヶ谷遺跡は静岡平野の北西部安倍川の氾濫、洪水等により形成された扇状地の北端であり、麻機低湿地の南部に位置する。麻機沼の低湿地帯を安倍川の堆積物で出口を塞いでしまったという静岡平野の中でも一大集水帯である。この地下水位の高い池ヶ谷遺跡では、7区の標高4.3m前後のFⅡ層上面において、古墳時代前期に廃絶された水田が検出され、この水田より多数の板状田下駄が検出されたのである。このFⅡ層はその下にG層という上位が泥炭層、下位が黒色粘土層の層が1 m以上堆積している。つまりFⅡ層上面では、地下水位が高いと同時に、そのFⅡ層も粘土層であり更にその下層は厚い泥炭層という非常に軟柔な地盤であったことがわかる。7区より東の1・2区では同時期の水田の標高は6.6m前後で、7区より1 m以上も高く、下

層の泥炭層も7区に比して薄い。1・2区では田下駄の出土点数が7区に比して極端に少ないことが第37表の計測表で見れる。また池ヶ谷遺跡付近ではつい近年まで麻機沼の湿田と同形態の田下駄が使用されていたという。強湿地の水田であった瀬名遺跡は、やはり静岡平野の北東端に位置するが、麻機沼を水源とした巴川流域の低湿地帯の中にある。長尾川が開削した扇状地にのり、長尾川の押し出した多量の土砂の堆積した地形に立地する。瀬名遺跡で板状田下駄をも出土した2・3区12層水田を見ると、この12層上面標高は8.0m前後である。12層の粘土層はその下に砂層を挟み、14層も水田耕作土の粘土層である。14層の下には、厚い15層、17層、18層、19層という1mを越える砂礫層がある。以上、池ヶ谷遺跡の7区と瀬名遺跡の2・3区を比した場合、いずれも低湿地性の水田ではあるが、池ヶ谷遺跡の7区は相当軟柔な地盤の強湿地性水田であり、瀬名遺跡の2・3区は下層に厚い砂礫層を含む。下層地盤は堅固な湿田であることが了解できよう。

この池ヶ谷遺跡7区と瀬名遺跡2・3区に地盤の差異が、板状田下駄の平面積に反映されていると考えたい。既述のように、池ヶ谷遺跡出土の板状田下駄と瀬名遺跡出土の田下駄とは、形態上はほぼ類似し、時期も重なるという一致、類似点がある一方、池ヶ谷遺跡の田下駄は瀬名遺跡のそれに比して横に長く面積も大きい。それは同技術の田下駄を所有しながらも強湿地であるが故、浮力をより付けるため、横長にし、表面積を確保したという背景があったことを推察させる。

輪カンジキ型田下駄の場合、表面積は輪の楕円形の面積を有効面積と考え出してみた。第50図の輪カンジキ型田下駄の形態変遷図で示された1、2、3、4、5、6、10、13、15、16に関してはほぼ推定の有効面積が出るため算出した。1は1268.6cm²、3は824.3cm²、5は1661.1cm²、10は1358.3cm²、13は1603.9cm²、15は961.8cm²となった。2、4、6、16はそれぞれ1、3、5、15とセット関係にあるため、それらとほぼ近い面積を示している。平均面積は1258.5cm²である。先述の板状田下駄に比すと若干面積が大きいようであるが、輪カンジキ型田下駄の場合、足板、横木、輪との間に空隙があるため、ここである有効面積は、板状田下駄の表面積より面積に対する浮力はつきにくいという事情があり、輪カンジキ型田下駄の有効面積の方が板状田下駄の面積より大きくなるのは当然であろう。それに比しても輪カンジキ型田下駄の有効面積は板状田下駄の面積の大小の幅内にあり、輪カンジキ型をしても湿田で足を浮かせるという機能上、板状田下駄と同一の機能を十分に発揮することができる。

8 まとめ

瀬名遺跡出土の田下駄を中心に田下駄の形態変遷とその機能について検討してきた。検討の視点が多岐にわかれてしまったため、検討した視点をここでは確認しておきたい。田下駄とは湿田において足が沈まないために履く下駄を示し、その形態には大別して板状の田下駄と輪カンジキ型田下駄がある。この定義と分類に基き、瀬名遺跡出土の田下駄の形態変遷を追った。弥生時代中期後半に板状田下駄が出現し、弥生時代後期後半から古墳時代前期に盛期を迎え、古墳時代中期頃に板状田下駄が消失し、輪カンジキ型田下駄がそれに替わっていく。輪カンジキ型田下駄の足板は緒孔なしのものから3つの緒孔のものへと変化し、民具例にまで直結するという形態変遷が確認できた。また、板状田下駄の出土遺構、出土地点を確認すると、瀬名遺跡においては、大規模畦畔の盛土中からの出土が大半であった。板状田下駄の穿孔技術に鉄器を用いたと類推できるものが、弥生時代後期から出現することが確認できる。板状田下駄の4つの緒孔の位置関係を計測値により定型化した穿孔技法があったことが了解でき、4孔の位置関係が明瞭になった。田下駄の平面積は有効な範囲があり、それは板状、輪カンジキ同様に言える。そして田下駄の表面積は地盤の軟弱度により強湿地では面積が大きくなるという傾向を示すことが想定できるようだ。

以上の諸点が拙文によってある程度明らかになってきたであろう。ただ検討に際しては、資料上の制

約に始まり、問題点、限界も指摘しうる。次の4点を挙げて終わりとする。第1点は検討資料の点数は多いにしても、あくまで一遺跡の資料が中心の検討であり、普遍性を語れる資料ではなかった。これは田下駄の出土遺跡が偏在するという事実からやむおえぬことと考える。第2点に輪カンジキ型田下駄の資料点数が少なく、形態変遷を板状田下駄との連続と捉えるにはまだ不十分であった。今後の出土例の増加を待ちたい。第3点目に土壌と田下駄の形態との関係は田下駄の出土状況、出土遺跡の立地等を含め、より詳細な検討が必要であろう。第4点目に湿田稲作農耕において、田下駄の果たした役割は、湿田稲作農業技術全般を視野に入れないと、ただ単なる水田で履く下駄というモノの検討で終わってしまう。それには当該時代の農具全般の中での田下駄の位置を確認する作業が今後必要となるであろう。

(中山正典)

<註>

- (1) 「大足」と「タゲタ・ナンバ」を総称する研究者に潮田鉄雄氏、市田京子氏、兼保保明氏、秋山浩三氏等がいる。
- (2) 小論文中で用いる機能とは、より具体的な使い方を示す用途ということばの意味をも含む。岡村道雄氏が「機能とは、あるものが持つ固有な役割、はたらくことであり、用途とはそれらの使いみちとか用いどころという意味」であるが、「機能と用途は一連のことであり、切り離して考えられない。また機能と用途とを厳密に区別する必要もない。」という考え方に沿う。
- (3) 例えば、潮田氏の「制作法、構造、名称による田下駄の推移」(潮田 1967)を見ると、輪カンジキ型田下駄が発展して杵型大足になったとしていたり、板状四孔田下駄が民具例のナンバに直結するとしていたりする。
- (4) 当初、横長の大きな板状田下駄に4孔以外の孔が穿たれているものが1、2点あったため、代掻き時にヒモを付け杵型大足のように手で引きながら歩行したのではと考えたが、検討したところ4孔以外の孔に規則性が見られず、4孔以外の孔の穿った理由が不明のままである。
- (5) 宮原氏に静岡の古代遺跡出土の木製品を見ていただいた折、穿孔技術についての所見を求めたが、やはり明瞭に石器の加工痕と鉄器のそれとを分離させる方法は刃先痕の観察以外手はないとのことであった。
- (6) ただ山木遺跡出土の舟形木製品の中には大形のものがあり、90cm近くのものもあり、輪カンジキ型田下駄にしては大きすぎるものもある。
- (7) 6は明瞭に1孔あるが、6とセットで出土した5は残存状態が悪いが緒孔らしいものが見られない。5、6の形態をどう考えるかは、今後検討すべきことであろう。
- (8) 15は4孔穿たれているが、前の2孔は一方が穿ち直しと考える。特に左側の穿孔は他の3孔と形状が異なり、直接用いた緒孔ではないと考える。
- (9) 瀬名遺跡出土の輪カンジキ型田下駄において、平安時代以降のものは帰属する年代観については不明瞭な点が多く、良好な資料と言えない。歴史時代以降の田下駄については、今後の良好な出土資料に待ちたい。
- (10) 田下駄の面積に関する検討は、元当研究所調査員の縄巻強氏が行った。特に平面積の分布図を作成する考え方を提供し、土壌と田下駄の面積との関係を示したのは縄巻氏であった。

<引用・参考文献>

- | | | |
|-------------|-------|---|
| 大場磐雄 | 1939年 | 「上総菅生遺跡の一考察(二)」『考古学雑誌』29-3 |
| 内田武志 | 1941年 | 『静岡県方言誌 分布調査第三輯民具篇』アチックミュージアム |
| 木下 忠 | 1954年 | 「弥生式文化 代における施肥の問題」『史学研究』57号 |
| 木下 忠 | 1969年 | 「おおしー代踏み用田下駄の起源と機能」『民具論集』1 慶友社 |
| 木下 忠 | 1974年 | 「田植と直播」『日本考古学の諸問題 考古学研究会十周年記念論文集』 |
| 木下 忠 | 1985年 | 『日本農耕技術の起源と伝説』雄山閣 |
| 潮田鉄雄 | 1964年 | 「千葉県の下駄」『民族学研究』29-2 |
| 潮田鉄雄 | 1966年 | 「続千葉県の下駄」『民族学研究』31-1 |
| 潮田鉄雄 | 1967年 | 「千葉県の田下駄-分布と仕様-」『民族学研究』32-1 |
| 潮田鉄雄 | 1967年 | 「田下駄の変遷」『物質文化』10号 |
| 潮田鉄雄 | 1968年 | 「茨城県の田下駄」『物質文化』12号 |
| 潮田鉄雄 | 1969年 | 「田下駄の変遷」『民具論集』1 慶友社 |
| 後藤守一 | 1962年 | 「葦山村山木遺跡」『葦山町史』第1巻 |
| 山口賢俊 | 1964年 | 「新潟県の下駄(I)」『新潟農林研究』16号 |
| 斎藤 宏 | 1967年 | 「伊豆葦山宮下遺跡」『葦山町史』第2巻 |
| 橋本 武 | 1968年 | 「猪苗代湖周辺の下駄(1)」『民具マンスリー』1-7 |
| 橋本 武 | 1968年 | 「猪苗代湖周辺の下駄(2)」『民具マンスリー』1-8 |
| 中村俊亀智 | 1976年 | 「シロフミ田下駄の諸系列-用具論的に-」『国立民俗学博物館研究報告』1-1 |
| 森田修平 | 1977年 | 「森浜遺跡出土の田下駄について」『民俗文化』168号 滋賀民俗学会 |
| 神野善治 | 1979年 | 「浮島周辺の生産用具-湿田農耕と沼の魚撈」『沼津市歴史民俗資料館紀要』3 |
| 神野善治 | 1982年 | 「浮島ヶ原の湿田農耕と用具」『中部地方の民具』明玄書房 |
| 乙益重隆 | 1980年 | 『上総菅生遺跡』中央公論美術出版 |
| 兼康保明 | 1985年 | 「田下駄」『弥生文化の研究』第5巻 雄山閣 |
| 町田 章 | 1985年 | 「木器の生産」『弥生文化の研究』第5巻 雄山閣 |
| 井之本 泰 | 1987年 | 「ウフセー代踏み田下駄」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 |
| 宮原晋一 | 1988年 | 「石斧・鉄斧のどちらで加工したか」『弥生文化の研究』第5巻 雄山閣 |
| 市田京子 | 1990年 | 「広島県の下駄」『木と民具-日本民具学会論集4-』雄山閣 |
| 佐々木長生 | 1990年 | 「門田条里制跡出土の田下駄について」『門田条里制跡発掘調査報告書』会津若松市教育委員会 |
| 秋山浩三 | 1993年 | 「『大足』の再検討」『考古学研究』40-3 |
| 岡村道雄 | 1985年 | 「機能論」『岩波講座 日本考古学1』岩波書店 |
| 山田昌久 | 1984年 | 「杭の加工痕について」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書-人工遺物・統括編-』埼玉県教育委員会 |
| アチックミュージアム編 | 1937年 | 『民具問答集』 |
| 葦山町教育委員会 | 1969年 | 「山木遺跡-第二次調査概報-」『葦山町史』第1巻 |
| 葦山町教育委員会 | 1976年 | 「山木遺跡-第三次調査概報-」『葦山町史』第1巻 |
| 葦山町教育委員会 | 1977年 | 「山木遺跡-第四次調査報告書-」『葦山町史』第1巻 |

日本考古学協会 1978年 『登呂』 東京堂出版
瓜生堂遺跡調査会 1980年 『恩智遺跡』 I・II
大阪文化財センター 大阪府教育委員会 1980年 『瓜生堂』
大阪文化財センター 大阪府教育委員会 1982年 『巨摩瓜生堂』
（財）大阪文化財センター 1983年 『友井東（その2）』
福島県高郷村教育委員会 1986年 『博毛遺跡』
（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986年 『年報』 6
静岡市教育委員会 1987年 『有東梔子遺跡』
沼津市教育委員会 1990年 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書II 遺物編』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985年 『川合遺跡調査概報』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1987年 『瀬名遺跡－昭和61年度発掘調査概報』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989年 『大谷川IV 遺物・考察編』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 『池ヶ谷遺跡調査概報』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 『瀬名遺跡調査概報』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 『角江遺跡調査概報』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 『長崎遺跡 I（遺構編）』